

春昼

泉鏡花

青空文庫

一

「お爺さん、お爺さん。」

「はあ、私けえ。」

と、一言で直ぐ応じたのも、四辺が静かで他には誰もいなかった所為であろう。そうでないと、その皺だらけな額に、顚巻を緩くしたのに、ほかほかと春の日がさして、とろりと酔ったような顔色で、長閑かに鋏を使う様子が――あのまたその下の柔な土に、しつとりと汗ばみそうな、散りこぼれたら紅の夕陽の中に、ひらひらと入って行きそうな――暖い桃の花を、燃え立つばかり揺ぶって頬に嚙っている鳥の音こそ、何か話をするように聞こえけれども、人の声を耳にして、それが自分を呼ぶのだとは、急に心付きそうもない、恍惚とした形であつた。

こつちもこつちで、かくたちどころに返答されと思つたら、声を懸けるのじやなかつたかも知れぬ。

何為なら、さて更めて言うことが些と取り留めのない次第なので。本来ならこの散策

子が、そのぶらぶら歩行の手すさびに、近頃買求めた安直な杖を、真直に路に立てて、鎌倉の方へ倒れたら爺を呼ぼう、逗子の方へ寝たら黙って置こう、とそれでも事は済んだのである。

多分は聞えまい、聞えなければ、そのまま通り過ぎる分、余計な世話だけれども、黙きりも些と気になった処、響の応ずるが如きその、（はあ、私けえ）には、聊か不意を打たれた仕誼。

「ああ、お爺さん。」

と低い四目垣へ一足寄ると、ゆっくりと腰をのして、背後へよいとこさと反るように伸びた。親仁との間は、隔てる草も別になかった。三筋ばかり耕やされた土が、勢込んで、むくむくと湧き立つような快活な香を籠めて、しかも寂寞とあるのみで。勿論、根を抜かれた、肥料になる、青々と粉を吹いたそら豆の芽生に交つて、紫雲英もちらほら見えたけれども。

鳥打に手をかけて、

「つかんことを聞くがね、お前さんは何じやないかい、この、其処の角屋敷の内の人じやないかい。」

親仁おやじはのそりと向直むきなつて、皺しわだらけの顔に一杯の日当り、桃の花に影がさしたその色
 に対して、打向うちむかうその方の屋根の葺ほうは、白昼青麦あおむぎを烘あぶる空に高い。

「あの家うちのかね。」

「その二階のさ。」

「いんえ、違います。」

と、いうことは素気そっけないが、話を振切ふりきるつもりではなさそうで、肩ひとを二ツ揺ゆりながら、
 鋤くわの柄えを返して地つちについてこっちの顔を見た。

「そうかい、いや、お邪魔をしたね、」

これを機しに、分れようすると、片手で顱はちまき巻かなぐを撈かり取とつて、

「どうしまして、邪魔も何もござりましねえ。はい、お前まえ様、何か尋たずねごとさつしやる
 かね。彼処あそこの家うちは表門おもてもんさ閉しまつておりませども、貸家かしやではねえが……」

その手拭てぬぐいを、裾すそと一緒に、下からつまみ上げるように帯はきへ挟はさんで、指ゆびを腰こしの両提ふたつきげ
 に突つきこ込んだ。これでは直ぐにも通れない。

「何なんね、詰つまらん事ことさ。」

「はいい?」

「お爺さんが彼家あすこの人ならそう言つて行ゆこうと思つて、別に貸家を捜しているわけではないのだよ。奥の方で少い婦人おんなの声こゑがしたものの、空家でないのは分つてゐるが、」

「そうかね、女中じよちゆうしゆう衆も二人ばかりいるだから、」

「その女中衆についてさ。私わたしがね、今彼処あすこの横手をこの路へかかつて来ると、溝の石垣の処ところを、ずるずるつと這はつてね、一匹いたのさ——長いのが。」

二

怪訝けげんな眉を臆おく面めんなく日に這はわせて、親仁おやじ、煙草入たばこいれをふらふら。

「へい、」

「余こゝろり好物ぶつな方ほうじやないからね、実は、」

と言つて、笑いながら、

「その癡恐くせわいもの見たさに立留たちどまつて見ていると、何なんじやないか、やがて半分ばかり垣根へ入つて、尾を水の中へぱたりと落して、鎌首かまくびを、あの羽目板はめいたへ入れたらうじやないか。羽目はめの中は、見た処ところ湯殿らしい。それとも台所かも知れないが、何しろ、内うちにや少い女わかた

ちの聲がするから、どんな事で吃驚^{びつくり}しまいものでもない、と思います。

あれツきり、座敷へなり、納戸^{なんど}へなりのたくり込めば、一も二もありやしない。それまでというもんだけれど、何処^{どこ}か板^{いた}の間^まにとぐろでも巻いている処へ、うっかり出^で会^{くわ}したら難儀^{なんぎ}だろう。

どの道余計^{みち}なことだけれど、お前さんを見かけたから、つい其処^{そこ}だし、彼処^{あそこ}の内^{うち}の人だつたら、ちよいと心づけて行^ゆこうと思つてさ。何ね、此処^{ここ}らじや、蛇なんか何でもないので、かも知れないけれど、

「はあ、青大将^{あおだいしょう}かね。」

といいながら、大きな口をあけて、奥底^{おくそこ}もなく長閑^{のどか}な日の舌に染^しむかと笑いかけた。「何でもなかあねえだよ。彼処^{あそこ}さ東京の人だからね。この間^{あいだ}も一件^{いっけん}もので大騒ぎをしたでがす。行つて見て進^{しん}ぜますべい。疾^とうに、はい、何処^{どこ}かずらかったも知んねえけれど、台所の衆^{しゅ}とは心^{こころ}安^{やす}うするでがすから、」

「じゃあ、そうして上げなさい。しかし心ない邪魔をしたね。」

「なあに、お前様、どうせ日は永^{なが}えでがす。はあ、お静かにござらっせえまし。」
こうして人間同士がお静かに分れた頃には、一件はソレ竜^{りゅう}の如きもの歟^か、凡慮^{ぼんりょ}の及ぶ

処でない。

散策子は踵を廻らして、それから、きりきりはたり、きりきりはたりと、鶏が羽うつよ
うな梭の音を慕う如く、向う側の垣根に添うて、二本の桃の下を通つて、三軒の田舎屋
の前を過ぎる間に、十八、九のと、三十ばかりなのと、機を織る婦人の姿を二人見た。
その少い方は、納戸の破障子を半開きにして、姉さん冠の横顔を見た時、腕白く
梭を投げた。その年取つた方は、前庭の乾いた土に筵を敷いて、背むきに機台に腰か
けたが、トンと足をあげると、ゆるくキリキリと鳴つたのである。

唯それだけを見て過ぎた。女今川の口絵でなければ、近頃は余り見掛けなない。可懐
しい姿、些と立佇つてという氣もしたけれども、小児でもいればだに、どの家も皆野面
へ出たか、人氣はこの外になかったから、人馴れぬ女だち物恥をしよう、いや、この男
の倅では、物怖、物驚をしようも知れぬ。この路を後へ取つて返して、今蛇に逢つ
たという、その二階屋の角を曲ると、左の方に脊の高い麦畠が、なぞえに低くなつて、
一面に颯と拡がる、浅緑に美しい白波が薄りと靡く渚のあたり、雲もない空に歴々
と眺めらるる、西洋館さえ、青異人、赤異人と呼んで色を鬼のように称うるくらい、
こんな風の男は髯がなくても（帽子被り）と言うと聞く。

もつと 尤も 一方は、そんな風に——よし、村のものの目からは青鬼赤鬼でも——蝶の飛
 ぶのも帆艇ヨットの帆かと思ゆるばかり、海水浴に開ひらけているが、右の方は昔ながらの山の形、
 まつくろ 真黒に、大鷲おおわしの翼打つばうち襲かねたる趣おもむきして、左右から苗代田なわしろだに取詰とりつむる峰つまの棲ひとえ、一重ひとえ
 一重ひとえごとに迫ひとえつて次第に狭く、奥の方暗かたく行詰ゆきつまつたあたり、打ぶつけなりの茅屋かやの窓は、
 山まなこが開いた眼に似て、あたかも大なる墓おおいひきがえるの、明け行く海かいから搔かき入いり、谷間たにまに潜ひそむ風情ふぜい
 である。

三

されば瓦かわらを焚やく竈かまどの、屋やの棟むねよりも高いのがあり、主ぬしの知れぬ宮みやもあり、無縁むえんになつた
 墓地きどもあり、頻しきりに落ちる椿つばきもあり、田おおいには大な鱒おきじょうもある。

あの、西南せいなん一帯の海の潮しほが、浮世の波に白帆しらほを乗せて、このしばらくの間に九十九折つづらおり
 ある山の峽かいを、一ツずつ湾わんにして、奥まで迎いに来ぬ内は、いつまでも村人は、むこう向むき
 になつて、ちらほらと畑はたう打うっているであらう。

丁ちようどいまの曲角まがりかどの二階家あたりに、屋根の七八ななやつ重かさなつたのが、この村の中心で、

それから峡の方へ飛々^{とびとび}にまばらになり、海手^{うみて}と二、三町^{ちようあいざんか}が間人家^{とだ}が途絶えて、かえつて折曲^{おれまが}つたこの小路^{こみち}の両側^{ふたがは}へ、また飛々^{とびとび}に七、八軒^{やちけん}続いて、それが一部落^{ひとがた}になっている。梭^{おさ}を投げた娘の目も、山の方へ瞳^{ひとみ}が通い、足踏^{あしふみ}みをした女房^{にようばう}の胸にも、海の波^{うみ}は映らぬらしい。

通りすがりに考えつつ、立離^{たちはな}れた。面^{おもて}を圧^{あつ}して菜種^{なたね}の花。眩^{まばゆ}い日影^{ひかげ}が輝くばかり。左^{ひだり}手で^{がけ}の崕^{かき}の緑^{ろく}なものも、向うの山の青いものも、偏^{かたえ}にこの真黄色^{まつきいろ}の、僅^{わず}かに限^{かぎ}あるを語るに過ぎず。足許^{あしもと}の細流^{せせらぎ}や、一段^{いちだん}颯^{さつ}と簾^{すだれ}を落^おして流るるさえ、なかなか花の色^{はな}を薄くはせぬ。

ああ目覚^{めざ}ましいと思う目に、ちらりと見たのみ、呉^{くれ}織^{はとり}文^{あや}織^{はとり}は、あたかも一枚^{まい}の白紙^{しろかみ}に、朦朧^{もうろう}と描^{えが}いた二個^{ふたつ}のその姿^{すがた}を残^{のこ}して余白^{あましろ}を真黄色^{まきいろ}に塗^ぬつたよう。二人^{ふたり}の衣服^{きもの}にも、手拭^{てぬぐい}にも、襷^{たすき}にも、前垂^{まえだれ}にも、織^はつていたその機^{はた}の色^{いろ}にも、聊^{いささ}もこの色のなかつただけ、一入^{ひとしお}鮮麗^{あざやか}に明瞭^{めいりょう}に、脳中^{のうちゆう}に描^{えが}き出^いされた。

勿論^{もちろん}、描^えいた人物^{にんぶつ}を判然^{はつぜん}と浮出^{うきだ}させようとして、この彩^{さい}色^{しよく}で地^じを塗^ぬ潰^{つぶ}すのは、画^えの手段^{しゅんた}に取^とつて、是^ぜか、非^ひか、巧^{こう}か、拙^{せつ}か、それは菜^{さい}の花^{はな}の預^{あず}かり知^かる処^{ところ}でない。

うつとりするまで、眼^{まの}前^{あたり}真黄色^{まきいろ}の中に、機織^{はたおり}の姿^{すがた}の美しく宿^{とど}つた時^{とき}、若い婦人^{おんな}の

衝と投げた梭の尖から、ひらりと燃えて、いま一人の足下を閃いて、輪になつて一ツ刎
 ねた、朱に金色を帯びた一條の線があつて、赫燿として眼を射て、流のふちなる
 草に飛んだが、火の消ゆるが如くやがて失せた。

赤棟蛇が、菜種の中を輝いて通つたのである。

悚然として、向直ると、突当りが、樹の枝から梢の葉へ搦んだような石段で、上に、

茅ぶきの堂の屋根が、目近な一朶の雲か見える。棟に咲いた紫羅傘の花の紫も手に取る
 ばかり、峰のみのりの黒髪にさしかざされた装の、それが久能谷の観音堂。

我が散策子は、其処を志して来たのである。爾時、これから参ろうとする、前途の石

段の真下の処へ、殆ど路の幅一杯に、両側から押被さつた雑樹の中から、真向にぬつと、
 大な馬の顔がむくむくと湧いて出た。

唯見る、それさえ不意な上、胴体は唯一ツでない。鬣に鬣が繋がつて、胴に胴が重な
 つて、凡そ五、六間があいだ獣の背である。

咄嗟の間、散策子は杖をついて立窘んだ。

曲角の青大將と、この傍なる菜の花の中の赤棟蛇と、向うの馬の面とへ線を引く
 と、細長い三角形の只中へ、封じ籠められた形になる。

奇怪なる地妖でないか。

しかし、若悪獸圍繞、利牙爪可怖も、※蛇及蝮蝎、気毒煙火燃も、薩陀彼処にましますぞや。しばらくして。……

四

のんきな馬士めが、此処に人のあるを見て、はじめて、のっそり馬の鼻頭に頭れた、真正面から前後三頭一列に並んで、たらたら下りをゆたゆたと来るのであった。

「お待遠さまでござえます。」

「はあ、お邪魔さまな。」

「御免なせえまし。」

と三人、一人々々声をかけて通るうち、流のふちに爪立つまで、細くなって躲したが、なお大なる皮の風呂敷に、目を包まれる心地であった。

路は一際細くなつたが、かえって柔かに草を踏んで、きりきりはたり、きりきりはたりと、長閑な機の音に送られて、やがて仔細なく、蒼空の樹の間漏る、石段の下に着く。

この石段は近頃すっかり修復が出来た。（従つて、爪尖のぼりの路も、草が分れて、一筋明らさまになつたから、もう蛇も出まい、）その時分は大破して、丁ど繕いにかかろうという折から、馬はこの段の下に、一軒、寺というほどでもない住職の控家がある、その背戸へ石を積んで来たもので。

段を上ると、階子が揺はしまいかと危むばかり、角が欠け、石が抜け、土が崩れ、足許も定まらず、よろけながら攀じ上つた。見る見る、目の下の田畠が小さくなり遠くなるに従うて、波の色が蒼う、ひたひたと足許に近づくのは、海を抱いたかかる山の、何処も同じ習である。

樹立ちに薄暗い石段の、石よりも堆い青苔の中に、あの螢袋という、薄紫の差俯向いた桔梗科の花の早咲を見るにつけても、何となく湿っぽい気がして、しかも湯瀉のあとを踏むように熱く汗ばんだのが、颯と一風、ひやひやとなつた。境内はさまで広くない。

尤も、御堂のうしろから、左右の廻廊へ、山の幕を引廻して、雑木の枝も墨染に、其処とも分かず松風の声。

渚は浪の雪を敷いて、砂に結び、巖に消える、その都度音も聞えそう、但残惜いま

でびたりと留んだは、きりはたり機はたの音。

此処ここよりして見てあれば、織姫おりひめの二人の姿は、菜種なたねの花の中ならず、蒼海原あおうなばらに描かれて、浪うかに泛ふぶらん風情ふぜいぞかし。

いや、参詣おまいりをしましょう。

五段きざはしえんの階、縁の下を、馬が駈け抜けそうに高いけれども、欄干らんかんは影も留めとどめない。昔はさこそと思われた。丹塗にぬりの柱、花狭間はなはざま、梁うつばりの波の紺青こんじょうも、金色こんじきの竜りゅうも色さみしく、昼ひつひの月、茅かやを漏りて、唐戸からどに蝶ちようの影さす光景ありさま、古き土佐絵の画面に似て、しかも名工の筆意ひつゐに合い、眩まばゆからぬが奥床おくゆかしゆう、そぞろに尊なつかく懐しい。

格子こうしの中は暗かつた。

戸張とばりを垂れた御廚子みずしの傍に、造花つくりばなの白蓮びやくれんの、気高く倣立おもかげつに、頭こうべを垂れて、引ひ退きりぞくこと二、三尺。心静かに四辺あたりにを見た。

合天井ごうてんじようなる、紅々こうこうなる、白々はくはくなる牡丹ぼたんの花、胡粉ごふんの倣消え残り、紅くれなゐも散留ちりとまつて、あ

たかも刻きざんだものの如く、髻ほうふつ髻まげとして夢に花園はなぞのを仰あおぐ思おもいがある。それら、花にも台うてなにも、丸柱まるばしらは言うまでもない。狐格子きつねこうし、唐戸からど、桁けたう、梁つばり、すもの此処ここ彼処かしこ、巡拜じゆんぱいの札ふだの貼りつけてないのは殆どない。

彫金^{ほりきん}というのがある、魚政^{うおまさ}というのがある、屋根安^{やねやす}、大工鉄^{だいいてつ}、左官金^{さかんきん}。東京の浅草^{あさくさ}に、深川^{ふかがわ}に。周防国^{すおうのくに}、美濃^{みの}、近江^{おうみ}、加賀^{かが}、能登^{のと}、越前^{えちぜん}、肥後^{ひご}の熊本^{くまもと}、阿波^{あわ}の徳島^{とくしま}。津々浦々^{つづらうら}の渡鳥^{わたりどり}、稲負^{いなお}せ鳥^{おどり}、閑古鳥^{かんこどり}。姿は知らず名を留めた^{とどめ}、一切の善男子^{ぜんなんし}善女人^{ぜんにょにん}。木賃^{きちん}の夜寒^{よさむ}の枕^{まくら}にも、雨の夜の苦船^{くるふね}からも、夢はこの処^{ところ}に宿るであらう。巡礼^{めぐり}たちが靈魂^{たましひ}は時々此処^{ここ}に来て遊ぼう^{あそぶ}。……おかし、一軒一枚の門札^{もんふだ}めくよ。

五

一座^{いざ}の靈地^{れいち}は、渠^{かれ}らのためには平等^{びやうどう}利益^{りやく}、樂^{たの}く美しい、花園^{はなづ}である。一度^{いちど}詣^{もつ}でたらんほどのものは、五十里^{ごじり}、百里^{ひゃくり}、三百里^{さんぱくり}、筑紫^{つくし}の海^{うみ}の果^はからでも、思いさえ浮^うんだら、東^つの間に此処^{ここ}に来て、虚空^{こくう}に花降^{はなふ}る景色^{けしき}を見よう。月に白衣^{びやくえ}の姿も拝^がもう。熱あるものは、楊柳^{ようりゅう}の露^{つゆ}の滴^{したたり}を吸^すうであらう。恋するものは、優柔^{しなやか}な御手^{みで}に縋^{すが}りもしよう。御胸^{おんむね}にも抱^{いだ}かれよう。はた迷える人は、緑^いの薨^{あけ}、朱^{あけ}の玉垣^{たまがき}、金銀^{きんぎん}の柱^{はしら}、朱欄^{しゅらん}干^{かん}、瑪瑙^{めのう}の階^{はし}はなからど。花唐戸^{はなからど}。玉楼^{ぎよくろう}金殿^{きんでん}を空想^{くうきやう}して、鳳凰^{ほうおう}の舞^まう竜^{りゆう}の宮居^{みやい}に、牡丹^{ぼたん}に遊ぶ麒麟^{きりん}を見ながら、獅子王^{ししおう}の座^ざに朝日影^{あさひかげ}さす、桜^{さくら}の花を衾^{ふすま}として、明月^{めいげつ}の如^{ごと}き真珠^{しんしゆ}を枕^{まくら}に、勿体^{もったい}なや、

御添臥を夢見るかも知れぬ。よしそれとても、大慈大悲、観世音は咎め給わぬ。

さればこれなる彫金、魚政はじめ、此処に靈魂の通う証拠には、いづれも巡拝の札を見ただけで、どれもこれも、女名前のも、ほぼその容貌と、風采と、従つてそ

の挙動までが、朦朧として影の如く目に浮ぶではないか。

かの新聞で披露する、諸種の義捐金や、建札の表に掲示する寄附金の署名が写真である時に、これは理想であるといつても可からう。

微笑みながら、一枚ずつ。

扉の方へうしろ向けに、大な賽銭箱のこなた、薬研のような破目の入った丸柱を視めた時、一枚懐紙の切端に、すらすらとした女文字。

うたゝ寐に恋しき人を見てしより

夢てふものは頼みそめてき

——玉脇みを——

と優しく美しく書いたのがあつた。

「これは御参詣で。もし、もし、」

はツと心付くと、麻の法衣の袖をかさねて、出家が一人、裾短に藁草履を穿き

しめて間近に来ていた。

振りむく振向いたのを、莞爾やかに笑み迎えて、

「些とこちらへ。」

賽銭箱の傍を通つて、格子戸に及腰。

「南無」とあとは口の裏で念じながら、左右へかたかたと静に開けた。

出家は、真直ぐに御廚子の前、かさかさと袈裟をずらして、袂からマツチを出すと、伸上つて御蠟を点じ、額に掌を合わせたが、引返してもう一枚、亘んだ人の前の戸を開けた。

虫ぼんだが一段高く、かつ幅の広い、部厚な敷居の内に、縦に四畳ばかり敷かれる。壁の透間を樹蔭はさすが、縁なしの畳は青々と新しかった。

出家は、上に何にもない、小机の前に坐つて、火入ばかり、煙草なしに、灰のくすばつたのを押出して、自分も一膝、こなたへ進め、

「些とお休み下さい。」

また、かさかさと袂を探つて、

「やあ、マツチは此処にもござつた、ははは、」

と、も一ツ机の下から。

「それではお邪魔を、ちよつと、拝借。」

とこなたは敷居越に腰をかけて、此処からも空に連なる、海の色より、より濃な霞を吸つた。

「真個に、結構な御堂ですな、佳い景色じやありませんか。」

「や、もう大破でござつて。おもりをいたす仏様に、こう申し上げては濟まんではありません。ははは、私力にもおいそれとは参りませんので、行届かんがちでございすよ。」

六

「随分御参詣はありますか。」

先ず差当り言うことはこれであつた。

出家は領くようにして、机の前に座を斜めに整然と坐り、

「さようでございます。御繁昌と申したいであります、当節は余りござりません。以

前は、莊嚴美麗結構なものでありましたそうで。

貴下、今お通りになりました。此処からも見えます。この山の裾へかけまして、ずつとあの菜種畠の辺、七堂伽藍建連なっております。書物にも見えますが、三浦郡の久能谷では、この岩殿寺が、土地の草分と申します。

坂東第二番の巡拝所、名高い霊場でございますが、唯今ではとんとその旧跡とでも申すようになりました。

妙なもので、かえって遠国の衆の、参詣がもうございます。近くは上総下総、遠くは九州西国あたりから、聞伝えて巡礼なさるのがあります。この方たちが、当地へござつて、この近辺で聞かれますと、つい知らぬものが多くて、大きに迷うなどと言う、お話しを聞くでございますよ。」

「そうしたもんです。」

「ははは、如何にも、」

と言つてちよつと言葉が途切れる。

出家の言は、聊か寄附金の勸化のように聞えたので、少し気になったが、煙草の灰を落そうとして目に留まつた火入の、いぶりくすぶつた色あい、マッチの燃さしの突込み加減。

巢鴨^{すがも}辺^{へん}に弥勒^{みろく}の出世^{しゅせ}を待つてゐる、真宗^{しんしゅう}大^{だい}学^{がく}の寄宿舍^{きよしやく}に似て、余^しり世帯^{よたい}氣^けがあり
 そうもない処^{ところ}は、大^{おお}に胸^{きょう}襟^{きん}を開^{ひら}いてしかるべく、勝手^{かたて}に見^みて取^とつた。

そこでまた清々^{すがすが}しく一^{ひと}吸^すして、山^{やま}の端^はの煙^{けむり}を吐^はくこと、遠見^{とおみ}の鉄拐^{てつかい}の如^{ごと}く、

「夏^{なつ}はさぞ涼^{すずし}いでしよう。」

「とんと暑^{あつ}さ知らずでござる。御堂^{おどう}は申^{まう}すまでもありません、下^かの仮庵^{かりあん}室^{しつ}なども至極^{しごく}そ

の涼^{すずし}いので、ほんの草葺^{くさぶき}でありますが、些^ちと御帰^{ごき}りがけにお立寄^{たちよ}り、御休^{ごき}息^{いき}なさいまし。
 木葉^{きは}を燻^{くす}べて渋茶^{しぶちや}でも献^{けん}じましょう。

荒^{あら}れたものでありますが、いや、茶釜^{ちやがま}から尻尾^{しつぽ}でも出^でましようなら、また一^{いっ}興^{きよう}で

ござる。はははは、」

「お羨^{うらやまし}い御境涯^{ごきようがい}ですな。」

と客^{きやく}は言^いつた。

「どうして、貴下^{あなた}、さように悟^{さと}りの開^{ひら}けました智識^{ちしき}ではございません。一軒屋^{ひとりのすまい}の一人住居^{ひとりずまい}

心寂^{しんじやく}しゅうござつてな。唯^{ただ}今^{いま}も御参詣^{ごさんぎ}のお姿^{すがた}を、あれからお見受^{みうけ}け申^{まう}して、あとを慕^もつ

て来^きましたほどで。

時に、どちらに御逗留^{ごとうりゆう}？」

「わたし 私^{わたし}は直^じきその停^{ステイ}車^{ション}場^{もより}最^{ところ}寄^{ところ}の処^{ところ}に、」

「しばらく、」

「先^{せん}々^{せん}月^{げつ}あたりから、」

「いずれ、御^ご旅^{りょ}館^{かん}で、」

「否^{いいえ}、一^{ひと}室^ま借^かりまして自^じ炊^{すい}です。」

「は、は、さようで。いや、不^ふ躰^{しつ}でありますが、思^{おも}召^{ほしめ}しがござったら、飯^{かり}庵^{あん}室^{じつ}御^ご

用^{よう}にお立^たて申^ましまする。

甚^{はなは}だ唐^{とう}突^{とつ}でありますが、昨^{けつ}年^{ねん}夏^げも、お一人^{ひとり}な、や^やはりか^かような事^{こと}から、貴^{あなた}下^{した}がたの

よう^{よう}な御^ご仁^{じん}の御^ご宿^{しゆく}をいたしたことがあります。

御^ご夫^ふ婦^ふでも宜^{よろ}しい。お二人^{ふたり}ぐ^ぐら^らいは楽^{らく}でありますから、」

「はい、あ^ありが^がとう。」

と莞^{にっこり}爾^りして、

「ちよつと、通^とりが^がかりでは、こ^{ところ}う^{ところ}い^いう^{ところ}処^{ところ}が、こ^こち^ちら^らに^にあ^あろ^ろう^うとは思^{おも}われ^れま^ませ^せん^んね。真^{ほんと}

個^うに佳^いい御^ご堂^{だう}です^すね、」

「折^げ々^げ御^ご遊^{ゆう}歩^ほにお^おい^いで^で下^{くだ}さい。」

「勿^{もつ}体^{たい}ない、おまいりに来^きましよう。」
 何^{なに}心^{こころ}なく言^いつた顔^{かほ}を、訝^{いぶ}しそ^うに打^{うち}視^{なが}めた。

七

出家は膝に手を置いて、

「これは、貴^{あなた}下^が方^たの口^{くち}から、そういうこ^うを承^{うけたまわ}ろうとは思^{おも}わ^んであり^ました。」

「何^{なぜ}故^こです^か、」

と問^とうては見^みた^が、予^{あらかじめ}め、その意^い味^みを解^かするに難^{かた}うは^ないのであ^った。

出家も、扁^{ひらた}くは^ある^が、ふ^つく^りした頬^ほに笑^{えみ}を含^こんで、

「何^{なぜ}故^こと申^{まを}す^でもあ^りま^せん^がな……先^{まづ}当^{あた}節^{せつ}のお若^{わか}い方^{かた}が……とい^いうのでご^ござ^る。は^は

は^は、近^きい話^わが^な。最^{もつと}も^もそ^う申^{まを}す^ほど、私^{わたくし}が、ま^まだ年^{ねん}配^{はい}ではあ^りま^せん^けれ^ども、」

「分^わり^まし^たと^も。青^{せい}年^{ねん}の、し^しか^も書^{しよ}生^{せい}が、と^おっ^しや^るの^でし^よう。

否^{いいえ}、そ^そう^いう御^ご遠^{えん}慮^{りょ}をな^なさ^るか^ら、そ^それ^れだ^から不^ふ可^けま^せん[。]そ^それ^れだ^から、」

とど^どう^うし^した^たの^のか、じ^じり^りと膝^{ひざ}を向^むけ直^{ただ}して、

「段々お宗旨が寂れます。こちらは何かお宗旨だか知りませんが。

相手は老朽ちたものだけで、年紀の少い、今の学校生活でもしたもののには、とても済度
はむずかしい、今さら、観音でもあるまいと言うようなお考えだから不可んのです。

近頃は爺婆の方が横着で、嫁をいじめる口叱言を、お念仏で句読を切ったり、
膚脱で鰻の串を横銜えて題目を唱えたり、……昔からもそういうのもなかったんじゃないが、まだまだ胡散ながら、地獄極楽が、いくらか念頭にあるうちは始末がよかった
のです。今じゃ、生悟りに皆が悟りを開いた顔で、悪くすると地獄の絵を見て、こりや
出来が可い、などと言ひ兼ねません。

貴下方が、到底相手にやなるまいと思つておいでなさる、少い人たちが、かえつて祖
師に憧がれてます。どうかして、安心立命が得たいと悶えてますよ。中にはそれがた
めに気が違うものもあり、自殺するものさえあるじゃありませんか。

何でも構わない。途中で、ははあ、これが二十世紀の人間だな、と思うのを御覧なすつ
たら、男子でも女子でもですね、唐突に南無阿弥仏と声をかけてお試しなさい。すぐに
気絶するものがあるかも知れず、たちどころに天窓を剃て御弟子になりたいと言おうも知
れず、ハタと手を拍つて悟るのもありましよう。あるいはそれが基で死にたくなるものも

あるかも知れません。

実際、串戯^{じょうだん}ではない。そのくらいなんですもの。仏教はこれから法燈^{ほうとう}の輝く時です。それなのに、何故か、貴下^{あんた}がたが因循^{いんじゆん}して引込思案^{ひっこみじあん}でいらつしやる。」

頻^{しきり}に耳を傾けたが、

「さよう、如何^{いか}にも、はあ、さよう。いや、私^{わたくし}どもとても、堅く申せば思想界は大維新^{だいいしん}の際^{さい}で、中には神を見た、まのあたり仏に接した、あるいは自^{みず}から救世主であるなどと言う、当時の熊本の神風連^{じんふうれん}の如き、一揆^{いつぎ}の起りましたような事も、ちらほら聞伝^{ききつた}えてはおりますが、いずれに致せ、高尚な御議論、御研究^{ごけん}の方でござって、こちとらづれ出家^{しゅ}がお守りをする、偶像^{おもう}なぞは……その、」

と言いかけて、密^{みつ}と御廚子^{みずし}の方^{かた}を見た。

「作^{さく}がよければ、美術品、彫刻物^{ちようこくもの}として御覧なさろうと言う世間。

あるいは今後、仏教は盛^{さかん}になろうも知れませんが、ともかく、偶像^{おもう}の方となりますると……その如何^{いか}なものでござろうかと……同一信仰^{おなじしんぎ}にいたしてからが、御本尊^{ごほんぞん}に對し、礼^{らい}拜^{はい}と申す方は、この前^{さき}どうあろうかと存じます。ははは、そこでございますから、自然^{あたら}、貴下^{あんた}がたには、仏教、即ち偶像教でないように思召^{おもほしめ}しが願いたい、御像^{おすがた}の方は、

高尚な美術品を御覧になるように、と存じて、つい御遊歩ごゆうほなどと申すような次第でございますよ。」

「いや、いや、偶像でなくつてどうします。御姿おすがたを拝まないで、何を私わたしたちが信ずるんです。貴下あなた、偶像とおっしゃるから不可いん。

名がありましよう、一体ごとに。

釈迦しやくか、文殊もんじゆ、普賢ふげん、勢至せいし、観音かんおん、皆、名があるではありませんか。」

八

「唯ただ、人と言え、他人です、何でもありません。これに名がつきましよう。名がつきますると、父となります、母となり、兄となり、姉となります。そこで、その人たちを、唯ただ、人にして扱いますか。

偶像も同一どういつです。唯ただ偶像なら何でもありません、この御堂のは観世音かんぜおんです、信仰をするんですよ。

じゃ、偶像は、木き、金かね、乃至ないし、土。それを金銀、珠玉しゆぎよくで飾り、色彩よそおを装ったものに

過ぎないと言うんですか。人間だつて、皮、血、肉、五臓、六腑、そんなもので束ねあげて、これに衣ものを着せるんです。第一貴下、美人だつて、たかがそれまでのもんだ。

しかし、人には靈魂がある、偶像にはそれが無い、と言うかも知れん。その、貴下、その貴下、靈魂が何だか分らないから、迷いもする、悟りもする、危みもする、安心もする、拝みもする、信心もするんですもの。

的がなくつて弓の修業が出来ますか。輕業、手品だつて学ばねばならんです。

偶像は要らないと言う人に、そんなら、恋人は唯だ慕う、愛する、こがるるだけで、一緒にならんでも可いのか、姿を見んでも可いのか。姿を見たばかりで、口を利かずとも、口を利いたばかりで、手に縋らずとも、手に縋ただけで、寝ないでも、可いのか、と聞いて御覽なさい。

せめて夢にでも、その人に逢いたいのが実情です。

そら、幻にでも神仏を見たいでしょう。

釈迦、文殊、普賢、勢至、觀音、御像はありがたい訳ではありませんか。―

出家は活々とした顔になつて、目の色が輝いた。心の籠った口のあたり、髯の穴も数えつびよう、

「申されました、おもしろい。」

ぴたりと膝に手をつけて、片手を額ひたいに加えたが、

「——うたゝ寐ねに恋しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき——」

と独り俯向ひとうつむいた口の裏うちに誦じゆしたのは、柱に記しるした歌である。

こなたも思わず彼処かしこを見た、柱なる蜘蛛ささがにの糸、あざやかなりけり水茎みずぐきの跡。

「そう承うけたまわれば恥はじい入る次第で、恥を申さねば分らんでありますが、うたゝ寐ねの、この和歌で

いぎる、」

「その歌が、」

とこなたも膝の進むを覚えす。

「ええ、御覧なさい。其処そこらじゆう中、それ巡拜じゆんぱい札ふだを貼り散らしたと申すわけで、中にはな、

売薬や、何かの広告に使いまするそうなが、それもありきたりで構わんであります。

また誰たれが何時いつのまに貼はつて参るかも分りませんので。ところが、それ、其処そこの柱の、そ

の……」

「はあ、あの歌ですか。」

「御覧になつたで、」

「先刻、貴下が声をおかけなすつた時に、」

「お目に留まったのでありましょう、それは歌の主が分っております。」

「婦人ですね。」

「さようで、最も古歌でありますそうで、小野小町の、」

「多分そうのようです。」

「詠まれたは御自分でありませんが、いや、丁とその詠み主のような美人でありましてな

、

「この玉脇……とか言う婦人が、」

と、口では澄ましてそう言つたが、胸はそぞろに時めいた。

「なるほど、今貴下がお話しになりました、その、御像のことについて、恋人云々のお言葉を考へて見ますと、これは、みだらな心ではのうて、行き方こそ違いまするが、かすかに照らせ山の端の月、と申したように、観世音にあらがる心を、古歌に擬えられたものであつたかも分りませぬ。——夢てふものは頼み初めてき——夢になりともお姿をと言う。」

真個に、ああいう世に稀な美人ほど、早く結縁いたして仏果を得た験も沢山ござい

ますから。

それを大^{おおづかみ}掴に、恋歌^{こいか}を書き散らして参った。怪^けしからぬ事と、さ、それも人によりけり、御経^{おきよう}にも、若有^{にやくうによにんせつよくぐなん}女人設欲^{にやくうによにんせつよくぐなん}求男、とありまするから、一^{いちがい}概に咎^{とが}め立てはいたさんけれども。あれがために一人殺したでござります。」

聞くものは一^{いつきよう}驚^{きつ}を吃した。菜の花に見た蛇のそれより。

九

「まさかとお思いなさるでありますよう、お話が大分^{だいしぬけ}唐突でござったで、」

出家は頼に手をあてて、俯^{うつむ}いてやや考え、

「いや、しかし恋歌^{こいか}でないといたして見ますと、その死んだ人^{ほう}の方が、これは迷いであったかも知れんでございます。」

「飛んだ話じやありませんか、それはまたどうした事ですか。」

と、こなたは何時^{いつ}か、もう御堂^{おどう}の畳に、にじり上^{あが}つていた。よしありげな物語を聞くのに、懐^{ふところ}が窮^{きゆう}屈^{うくつ}だったから、懐^{かい}中^{ちゆう}に押^{おしこ}込んであつた、鳥打^{とりうち}帽^{ぼう}を引出して、傍^{かたわら}に差

置いた。^{しお}

松風が音に立つた。^ねが、春の日なれば人よりも軽く、そよそよと空を吹くのである。
 出家は仏前の燈明^{とうみょう}をちよつと見て、

「さればでござつて。……」

実は先刻お話し^{はなし}した、ふとした御縁で、御堂^{おどう}のこの下の仮庵室^{かりあんじつ}へお宿をいたしました、
 その御仁^{ごじん}なのであります。

その貴下^{あなた}、うたゝ寝の歌を、其処^{そこ}へ書きました、婦人のために……まあ、言つて見ます
 れば恋煩^{こいわずら}い、いや、こがれ死^{じに}をなすつたと申すものでございます。早い話が、

「まあ、今時^{いまとき}、どんな、男です。」

「丁ど貴下^{あなた}のような方で、」

呀^あ？ 茶釜^{ちやがま}でなく、這般^{この}文福和尚^{ぶんぷくおしょう}、渋茶^{しぶちや}にあらぬ振舞^{ふるまい}の三十棒^{さんじゅうぼう}、思わす
 後に睦^{しりえ}若^{どうじやく}として、……唯苦笑^{ただくしやう}するある而已^{のみ}……

「これは、飛んだ処^{ところ}へ引合いに出しました、」

と言つて打笑^{うちわら}い、

「おつしやる事と申し、やはりこういう事からお知己^{ちかづき}になつたと申し、うっかり、これ

は、
「」

「否、結構ですとも。恋で死ぬ、本望です。この太平の世に生れて、戦場で討死をする機会がなけりや、おなじ畳の上で死ぬものを、憧れじにが洒落ています。」

華族の金満家へ生れて出て、恋煩いで死ぬ、このくらいありがたい事はありません

まい。恋は叶う方が可きそうなんですが、そうすると愛別離苦です。

唯死ぬほど惚れるというのが、金を溜めるより難いでしょう。」

「真に御串戯ものでおいでなさる。はははは、」

「真面目ですよ。真面目だけなお串戯のように聞えるんです。あやかりたい人ですね。

よくそんなのを見つけましたね。よくそんな、こがれ死をするほどの婦人が見つかりましたね。」

「それは見ることは誰にでも出来ます。美しいと申して、竜宮や天上界へ参らねば見られないのではござらんで、」

「じゃ現在いるんですね。」

「おりますとも。土地の人です。」

「この土地のですかい。」

「しかもこの久能谷くのやでございます。」

「久能谷の、」

「貴下あなた、何なんでございましょう、今日こんにち此処ここへお出でなさるには、その家うちの前を、御通行とおとりになられましたらうで、」

「その美人すまいの住居すまいの前をですか。」

と言う時、機はたを織はつた少い方わかの婦人おんなが目めに浮うんだ、赫耀かくようとして菜の花に。

「……じゃ、あの、やっぱり農家の娘で、」

「否々いやいや、大財産家だいざいさんかの細君こぎみでございます。」

「違ちがいました、」

と我われを忘れて、呟つぶやいたが、

「そうですか、大財産家おおがねもちの細君こぎみですか、じゃもう主ぬしある花なんですな。」

「さようでございます。それがために、貴下あなた、」

「なるほど、他人たにんのものですな。そうして誰たれが見ても綺麗きれいですか、美人びじんなんですかい。」

「はい、夏向なつむきは随分ずいぶん何千人なんせんという東京とうきょうからの客人きやくにんで、目の覚めるような美麗びれいな方かたもあります、なかなかこれほどはないでございます。」

「じゃ、私が見ても恋煩いをしそうですね、危険、危険。」

出家は真面目に、

「何故でございますか。」

「帰路には気を注げねばなりません。何処ですか、その財産家の家は。」

十

菜種にまじる茅家のあなたに、白波と、松吹風を右左り、其処に旗のような薄霞に、しつとりと紅の染む状に桃の花を彩った、その屋の棟より、高いのは一つもない。

「角の、あの二階家が、」

「ええ？」

「あれがこの歌のかき人の住居でござつてな。」

聞くものは慄然とした。

出家は何んの気もつかずに、

「尤も彼処へは、去年の秋、細君だけが引越して参ったので。丁ど私がお宿を致したその

御仁が……お名は申しますまい。」

「それが可うございます。」

「唯、客人——でお話をいたしましょう。その方が、庵室に逗留中、夜分な、海へ入つて亡くなりました。」

「溺れたんですか、」

「と……まあ見えるでございます、亡骸が岩に打揚げられてござったので、怪我が、それとも覚悟の上か、そこは先ず、お聞取りの上の御推察であります、私は前申す通り、この歌のためじやようにな、」

「何しろ、それは飛んだ事です。」

「その客人が亡くなりましたして、二月ばかり過ぎてから、彼処へ、」

と二階家の遥なのを、雲の上から蔽うよう、出家は法衣の袖を上げて、

「細君が引越して来ましたので。恋じや、迷じや、という一騒ぎござった時分は、この浜方の本宅に一族、……唯今でも其処が本家、まだ横浜にも立派な店があるのであります、主人は大方その方へ参っておりますが。」

この久能谷の方は、女中ばかり、真に閑静に住んでおります。」

「すると別荘なんですね。」

「いやいや、——どうも話がいろいろになります、——ところが久能谷の、あの二階家が本宅じゃそうで、唯今の主人も、あの屋根の下で生れたげに申します。

その頃は幽^{かすか}な暮^くしで、屋根と申した処^{ところ}が、ああではありますまい。月も時雨^{しぐれ}もばらばら^{ぶき}。それでも先代の親仁^{おやし}と言うのが、もう唯今では亡くなりましたが、それが貴^{あなた}下、小作

人ながら大の節儉^{しまつや}家で、積年の望みで、地面を少しばかり借りましたのが、私庵^{わたくあん}室^{むろ}の背戸^どの地続きで、以前立派な寺がありました。その住職^{じゆうしよく}の隠居所^{いんきょしょ}の跡だったそうにございますよ。

豆を植えようと、まことにこう天氣の可^いい、のどかな、陽炎^{かげろう}がひらひら畔^{あぜ}に立つ時分。親仁殿^{おやしどの}、鋤^{くわ}をかついで、この坂下へ遣^やつて来て、自分の借地^{しゃくち}を、先^まずならしかけたのでございます。

とッ様昼^{ひるあが}上りにせつせえ、と小児^{こども}が呼びに来た時分、と申すで、お昼頃でありましような。

朝疾^とくから、出しなには寒かったで、布子^{ぬのこ}の半纏^{はんてん}を着ていたのが、その陽気なり、働^{はたら}き通しじや。親仁殿は向^む願^{こう}卷^{まき}、大肌脱^{おおはだぬぎ}で、精々^{せつせつ}と遣^やつていた処^{ところ}。大抵^{たいてい}借用分の

地券面^{ちけんめん}だけは、仕事^{しごと}が済んで、これから些^ちとほまちに山^{やま}を削ろうという料簡^{りょうけん}。ずかずか山の裾^{すそ}を、穿^ほりかけていたそうありますが、小児^{こども}が呼びに來たについて、一服^{いつぷく}遣^やるべいかで、もう一^{ひとく}鍬^{くわ}、すんと入^いれると、急に土^{つち}が軟^{やわ}かく、ずぶずぶと柄^えぐるみにむぐずり込^こんだで。

ずいと、引抜いた鍬^{くわ}について、じとじと染^{にじ}んで出たのが、真紅^{まつか}な、ねばねばとした水^{みづ}じゃ、」

「死骸^{しがい}ですか、」と切込^{きりこ}んだ。

「大違^{ちが}い、大違^{ちが}い、」

と、出家^{しゅつが}は大きくかぶりを掉^ふつて、

「註文^{ちゅうもん}通^とり、金子^{かね}でござる、」

「なるほど、穿^ほ当^あてましたね。」

「穿^ほ当^あてました。海^{うみ}の中^{なか}でも紅^{べに}色の鱗^{うろこ}は目^め覚^さしい。土^{つち}を穿^ほつて出^でる水^{みづ}も、そういう場合^{ばい}に

は紫^{むらさ}より、黄^き色^{いろ}より、青^{あお}い色^{いろ}より、その紅^{べに}色^{いろ}が一^{いち}番^{ばん}見^みる目^めを驚^{おど}かせます。

はて、何^{なん}んであろうと、親^{おや}仁^じ殿^{どの}が固^かくなつて、もう二^{ふた}、三^{さん}度^ど穿^ほり抜^ぬげると、がつくり、うつろになつたので、山^{やま}の腹^{はら}へ附^く着^ついて、こ^のう^そ覗^{のぞ}いて見^みたそうにござる。」

十一

「大蛇だいじゃあぎとあが顚かきだを開いたような、真紅まつかな土の空洞うつろの中に、づぼらとした黒い塊かたまりが見えたのを、
鍬くわの先で掻出して見ると——甕かめで。

蓋ふたが打欠ぶつかけていたそうですが、其処そこからもどろどろと、その丹色にいろに底澄そこすんで光
のある粘土ねばつちのようなものが充満いつぱい。

別に何んにもありませんので、親仁殿おやじどのは惜気おしげもなく打覆ぶつかえして、もう一箇ひとつあった、そ
れも甕かめで、奥の方へ縦たてに二ツ並んでいたと申します——さあ、この方が真物ほんものでござった。
開あけかけた蓋ふたを慌あわてて圧おさえて、きよろきよると其処そこらみまわしたそうではございますよ。

傍そばにいて覗のぞき込んでいた、自分の小児こどもをさえ、睨にらむようにして、じろりと見ながら、ど
う悠悠ゆうゆうと、肌はだなぞを入れておられましょう。

素肌すはだへ、貴下あなた、嬰兒あかんぼを負おぶうように、それ、脱いで置いたばろ半纏はんてんで、しつかりくるん
で、背負しよいあ上げて、がくつく腰を、鍬くわを杖つえにどっこいなじや。黙もくっていろよ、何んにも言う
な、きつと誰たれにも饒舌しゃべるでねえぞ、と言いい続けて、内うちへ帰かえって、納戸なんどを閉切しめきつて暗くして、

お仏壇ぶつだんの前むしろへ筵むしろを敷いて、其処そこへぎくぎくと装もりあ上げた。尤もつとも年としが経たつて薄黒はくくなつていたそうでありますが、その晩から小屋は何んとなく暗夜やみよにも明るかつた、と近所きんじよのものが話でござつて。

極ごく性しやうな朱しゆでござつたらう、ぶちまけた甕かめ充いつぱい満まんのが、時ならぬ曼珠沙華まんじゆしやげが咲いたように、山際やまぎわに燃えていて、五月雨さみだれになつて消えましたとな。

些ちつと日数ひかずが経つてから、親仁むらかたどのは、村方ようたしの用達ようたしかたがた、東京へ参つたついでに芝口しばぐちの両換店りやうがえやへ寄つて、汚きたない煙草たばこ入いれから煙草の粉こなだらけなのを一枚だけ、そつと出して、いくらに買わつしやる、と当つて見ると、いや抓つまんだ爪つめの方が黄色きばいくらいでござつたに、正しょうのものとて争あわれぬ、七両りやうならば引替ひきかえにと言うのを、もツと氣張きばつてくれさつせいで、とうとう七両しちりやう一分ぶんに替えたのはじまり。

そちこち、氣長きながに金子かねにして、やがて船一艘せんそう、古物ふるものを買い込んで、海うみから薪炭まきすみの荷にを廻まわし、追々おいおい材木そくへ手を出しかけ、船の数も七艘しちそうまでに仕上げた時、すつぱりと売物うりものに出して、さて、地面じめんをかう、店を拡げる、普請ふしんにかかる。

土台きまが極きまると、山の貸元かしもとになつて、坐まつていて商売しょうらいが出来できるようになりました、高利こうりは貸かします。

どかとした山の林が、あの裸になつては、店さきへすくすくと並んで、いつの間にか金かねを残しては何処どこへか参る。

そのはずでござるて。

利のつく金子かねを借りて山をかう、木を伐りかけ、資本もとでに支える。ここで材木を抵当ていとうにして、また借りる。すぐに利がつく、また伐りかかる、資本もとでに支える、また借りる、利でござろう。借りた方は精々せつせつと樹を伐り出して、貸元かしもとの店へ材木を並べるばかり。追つかけられて見切つて売るのを、安く買い込んでまた儲ける。行つたり、来たり、家の前を通るものが、金子かねを置いては失せるのであります。

妻子眷属さいしけんぞく、一時いっときにどしどしと殖えて、人は唯ただ、天狗てんぐが山を飲むような、と舌を巻いたでありますが、蔭じや——その——鋏くわを杖つえで胴震どうぶるいの一件をな、はははは、ちとら、その、も一ツの甕かめの朱しゆの方だつて、手を押おッつけりや血になるだ、なぞと、ひそひそ話ばなしを遣やるのでござつて、」

「そういう人たちはまた可い塩梅あんばいに穿り当てないもんですよ。」
と顔を見合せて二人が笑つた。

「よくしたものでございます。いくら隠していることでも何処どこをどうして知れますかな。」

いや、それについて、」

出家は思おも出したように、

「こういう話がございます。その、誰にも言うな、と堅く口留めくちどめをされた齊之助せいのみすけという

小児こどもが、（父様とつさまは野良のらへ行つて、穴のない天保銭てんぼうせんをドシコと背負しょつて歸らしたよ。」

……如何いかでござる、ははははは。」「

「なるほど、穴のない天保銭。」「

「その穴のない天保銭が、当主でございます。多額納税議員たがくのうぜいぎん、玉脇齊之助たまわきせいのみすけ、令夫人お

みを殿、その歌を聞いた美人であります、如何いかでございます、貴下あなた、」

十二

「先ずお茶を一ツ。御約束通り渋茶でござつて、碌ろくにお茶台ちやだいもありませんかわりには、がらんと自然に片づいております。お寛ぎ下さいくつろ。秋になりますと、これで町へ遠うございますかわりには、栗柿くりかきに事を欠きませぬ。鳥からすを追つて柿を取り、高音たかねを張ります。鴟もずを驚かして、栗を落してなりと差上げましょうに。」

まあ、何よりもお楽に、」

と袈裟けさをはずして釘くぎにかけた、障子しょうじに緋桃ひももの影法師かげぼうし。今物語いまものがたりの朱しゆにも似て、破やれぬあたれを暖ぬく燃ゆる状さま、法衣ころもをなぶる風情ふぜいである。

庵室あんじつから打仰うちあおぐ、石の階子はしこは梢こすえにかかつて、御堂みどうは屋根のみ浮いたよう、緑の雲にふつくりと沈んで、山の裾すその、縁えんに迫つて萌葱もえぎなれば、あま下る蚊帳さがの外かやに、誰待たれつとしもなき二人、煙けふらぬ火鉢ひばちのふちかけて、ひらひらと蝶ちょうが来る。

「御堂おどうの中では何んとなく気もあらたまります。此処ここでお茶をお入れ下すつた上のお話じや、結構けつこう過ぎますほどですが、あの歌に分れて来たので、何んだかなごり惜おしい心こころ持もちもします。」

「けれども、石段だけでも、婀娜あだな御本尊ごほんぞんへは路みちが近うなつてございますから、はははは。実の処じつところ仏の前では、何か私わたくしが自分に懺悔ざんげでもしますようで心苦しい。此処ここでありますと大きに寛くわぐでございます。

師のかげを七尺しやく去るともうなまけの通りで、困つたものでありますわ。

そこで客人でございます。――

日頃のお話ぶり、行為おこない、御容ごようす子すな、」

「どういふ人でした。」

「それは申しますまい。私も、盲目めくらの垣かき覗ぞきよりもそツと近い、机つくえ覗ぞきで、読んでおいでなさつた、書物しょもつなどの、お話うかがも伺うつて、何をなさる方じやと言いう事も存ぞんじておりますが、経きやうもん文ぶんに書いてあることさえ、愚昧ぐまいに饒舌しゃべると間違まちがいます。

故人こじんをあやまり伝えてもなりませず、何か評ひやうをやるようにも当あたりますから、唯々ただただ、かのな、婦人ふじんとの模様ようようだけ、お物語ものがたりりしましょうで。

一日あるひ晩方ばんがた、極暑ごくしよのみぎりでありました。浜はまの散歩さんぽから返かへつてござつて、（和尚おしょうさん、些ちつと海うみへ行いつて御覧ごらんなさいませんか。綺麗きれいな人がいますよ。）

（ははあ、どんな、貴下あなた、）

（あの松原まつはらの砂路すなぢから、小松橋こまつばしを渡わたると、急にむこうが遠目金とめがねを嵌はめたように円まるい海うみになつて富士ふじの山やまが見みえますね、）

これは御存ごぞんじでございましょう。」

「知しつていますとも。毎日のように遊びに出でますもの、」

「あの橋はしの取附とりつきに、松まつの樹とで取廻とりまわして——松原まつはらはずツと河がを越こして広ひろい洲すの林はやしになつておりますな——そして庭にわを広く取とつて、大玄関おおげんかんへ石いしを敷詰しきつめた、素すばらしい門かどのある

邸やしきがございましょう。あれが、それ、玉脇たまわきの住居すまいで。

実はあの方ほうを、東京の方かたがなさる別荘を真似まねて造ったであります、主人が交際つきあいずきで頻しきりと客をしまする処ところ、いずれ海が、何よりの呼物よびものでありますに。この久能谷くのやの方は、些ちつと足場あしばが遠くなりますから、すべて、見得装飾みえかざりを向うへ持つて参つて、小松橋こまつばしが本宅のようになつております。

そこで、去年の夏頃は、御新姐ごしんぞ。申すまでもない、そちらにいたでございます。

でその——小松橋を渡ると、急に遠目金とおめがねを覗のぞくような円い海の硝子がらすへ——ぱつと一杯に映うつつて、とき色の服の姿が浪の青いのと、巔いただきの白い中へ、薄い虹にじがかかったように、美しく靡なびいて来たのがある。……

と言われたは、即ちすなわ、それ、玉脇たまわきの……でございます。

しかし、その時はまだ誰だか本人も御存じなし、聞く方でも分りませんので。どういう別嬪べっぴんでありました、と串戯じようだんにな、団扇うちわで煽あおきながら聞いたでございます。

客人は海水帽を脱いだばかり、まだ部屋へも上あがらず、その縁側えんがわに腰をかけながら。
 (誰方どなたか、尊とうたいくらいでした。)

十三

「大分^{だいぶん}気高く見えましたな。

客人^{きやくん}が言うには、

(二、三間^{げん}あいを置いて、おなじような浴衣^{ゆかた}を着た、帯^きを整然^{きちん}と結んだ、女中と見えるのが附^ついて通りましたよ。

唯^{ただ}すれ違いざまに見たんですが、目鼻立ちのはつきりした、色の白いことと、唇^{あか}の紅さがつたらありませんでした。

盛装^{まつそう}という姿だのに、海水帽^{かいすいぼう}をうつむけに被^{かぶ}つて——近所^{ひさし}の人でもあるように、無造作^{むそうさく}に見えましたつけ。むこう、そうやって下を見て帽子^{ぼうし}の廂^{ひさし}で目を避^よけるようにして来たのが、真直^{まっすく}に前へ出たのと、顔を見合^あわせて、両方へ避^さける時、濃い睫毛^{まつげ}から瞳^{ひとみ}を涼しく睜^{みひら}いたのが、雪舟^{せつしゅう}の筆^{ふで}を、紫式部^{むらさきしきぶ}の硯^{すずり}に染めて、濃淡^{のうたん}のぼかしをしたようだった。

何んとも言えない、美しさでした。

いや、こういうことをお話^{わたくし}します、私は鳥羽^{とばえ}絵^えに肖^にているかも知れない。

さあ、御飯^{ごはん}を頂いて、柄^{から}相^{そう}応^{おう}に、月夜^{とうなす}の南^な瓜^{なす}畑^{ばたけ}でもまた見に出ましようかね。
 爾^{その}晚^{ばん}は貴^{あなた}下^{ただ}、唯^{ただ}それだけの事で。

翌日また散歩に出て、同じ時分に庵室^{あんじつ}へ歸つて見えましてから、私^{わたくし}が串^{じょう}戯^{だん}に、

(雪舟の筆は如何^{いか}でござった。)

(今日は曇^せった所^い為^いか見えませんでした。)

それから二、三日経^たつて、

(まだお天氣が直りませんな。些^ちと涼しすぎるくらい、御歩^{おひろい}行^{よう}には宜^{よろ}しいが、やはり雲が
 くれでござったか。)

(否^{いや}、源^{げん}氏の題^{だい}に、小松橋^{こまつばし}というのはありませんが、今日はあの橋の上で、)

(それは、おめでたい。)

などと笑いまする。

(まるで人違^いいをしたように粹^いでした。私^{わたし}がこれから橋を渡ろうという時、向^{たも}うの袂^とへ、
 十二、三を頭^{かしら}に、十歳^{とお}ぐらいのと、七八歳^{ななやっつ}ばかりのと、男^この児^こを三人連^れて、その中の
 小さいのの肩を片手^たで敲^{たた}きながら、上から覗^{のぞ}き込^こむようにして、莞爾^{にっこり}して橋の上へかかっ
 て来^きます。

どんな婦人でも羨しがりそうな、すなおな、房りした花月巻で、薄お納戸地に、ちらちらと膚の透いたような、何んの中形だか浴衣がけで、それで、きちんとした衣紋附。

絹でしよう、空色と白とを打合わせの、模様はちよつと分らなかつたが、お太鼓に結んだ、白い方が、腰帯に当つて水無月の雪を抱いたようで、見る目に、ぞツとして擦れ違ふ時、その人は、忘れた形に手を垂れた、その両手は力なさそうだったが、幽にぶるぶると肩が揺れたようでした、傍を通つた男の氣に襲われたものでしょう。

通り継ると、どうしたのか、我を忘れたように、私は、あの、低い欄干へ、腰をかけたしまつたんです。抜けたのだなぞと言つては不可ません。下は川ですから、あれだけの流れでも、落ちようもんならそれつきりです——淵や瀬でないだけに、救助船とも喚かれず、また叫んだ処で、人は串戯だと思つて、笑つて見殺しにするでしょう、泳を知らないから、)

と言つて苦笑をしなかつたつけ……それが眞実になつたのでございます。どうしたことが、この恋煩に限つては、傍のものは、あはあは、笑つて見殺しにいたします。

わたくし 私はじめ串戯半分、ひやかしかたがた、今日こんにちは例のは如何いかにで、などと申したでございます。

これは、貴下あなたでもさようでありましょう。」

されば何んと答えよう、喫のんでた煙草たばこの灰をはたいて、

「ですがな……どうも、これだけは真面目まじめに介抱かいほうは出来かねます。娘わづらが煩わづらうのだと、乳う

母ははが始末はつまつをする仕来しきたりになつておりますがね、男のは困りますな。

そんな時、その川で沙魚はぜでも釣つていたかつたですね。」

「ははは、これはおかしい。」

と出家きようは興きようありげにハタと手を打つ。

十四

「これはおかしい、釣つりといえは丁どちようその時、向う詰づめの岸しやがに踞しゃがんで、ト釣つていたものがあつたでござる。橋はしづめ詰づめの小店こみせ、荒物あきなを商う家の亭主ていしゅで、身体からだの瘦やせて引ひっし緊まつたには似ない、禪ぜんの緩い男で、因果いんがとのべつ釣つりをして、はだけていましょう、真まことにあぶなツかしい形

でな。

渾名あだなを一厘土器いちもんかわらけと申すでござる。天窓あたまの真中の兀工合はげぐあいが、宛然さながらですて——川端

の一厘土器——これが爾時そのときも釣つっていました。
庵室あんじつの客人きやくじんが、唯今ただいま申す欄干らんかんに腰を掛けて、おくれ毛越げこしにはらはらと靡なびいて通る、雪のような襟脚えりあしを見送ると、今、小橋こはしを渡った処ところで、中の十歳位とおのがじやれて、その腰へ抱だき着いたので、白魚しらおという指さを反そらして、軽くその小児こどもの背中を打った時だったと申します。

(お坊ちやま、お坊ちやま、)

と大声で呼び懸けて、

(手巾ハンケチが落ちました、)と知らせたそうですが、件くだんの土器殿かわらけどのも、餌えさは振舞ふるまう気で、粹いきな後姿を見送っていたものと見えますよ。

(やあ、)と言つて、十二、三の一番上の児こが、駈こけて返つて、橋の上へ落して行つた白手巾ハンケチを拾つたのを、懷中ふところへ突込んで、黙もくつてまた飛んで行つたそうぞ。小児こどもだから、辞儀じぎも挨拶あいさつもないでございます。

御新姐ごしんぞが、礼心れいごころで顔だけ振向いて、肩おとがへ、頤がをつけるように、唇を少し曲げて、そ

の涼い目で、熟とこちらを見返ったのが取違えたものらしい。私が許の客人と、ぴつたり
 出会ったでありましょう。

引込まれて、はツと礼を返したが、それツきり。御新姐の方は見られなくつて、傍を向
 くと貴下、一厘土器が怪訝な顔色。

いやもう、しつとり冷汗を掻いたと言う事、——こりやなるほど。極がよくない。

局外のものが何んの気もなしに考えれば、愚にもつかぬ事なれど、色気があつて御覧じ

ろ。第一、野良声の調子ツぱずれの可笑い処へ、自分主人でもない余所の小児を、坊やと

も、あの児とも言うにこそ、へつらいがましい、お坊ちやまは不見識の行止り、申さば

器量を下げた話。

今一方からは、右の土器殿にも小恥かしい次第でな。他人のしんせつで手柄をし

たような、変な羽目になったので。

御本人、そうとも口へ出して言われませなんだが、それから何んとなく鬱ぎ込むのが、
 傍目にも見えたであります。

四、五日、引籠つてござったほどで。

後に、何も彼も打明けて私に言いなさった時の話では、しかしまたその間違が縁にな

つて、今度出会つた時は、何んとなく両方で挨拶でもするようにはせまいか。そうすれば、どんなにか嬉し^{うれ}かるう、本望^{ほんもう}じゃ、と思われたそうな。迷いと申すはおそろしい、情ないものでござる。世間大概^{たいがい}の馬鹿も、これほどなことはないでございます。

三度目には御本人、

「また出会つたんですかい。」

と聞くものも待ち構える。

「今度は反対に、浜の方から帰つて来るのと、浜へ出ようとする御新姐^{ごしんぞ}と、例の出口の処で逢つたと言います。

大分もう薄暗くなつていましたそうで……土用^{どよう}あけからは、目に立つて日が詰^{つま}ります処へ、一度は一度と、散歩のお帰りが遅くなつて、蚊遣^{かや}りでも我慢が出来ず、私が此処^{わたくしここ}へ蚊帳^やを釣^もつて潜^{もぐりこ}込んでから、帰つて見えて、晩飯^{ばんめし}ももう、なぞと言われるさえ折々の事。爾^{そのとき}時も、早や黄昏^{たそがれ}の、とある、人顔^{ひとがお}、臃^{おぼろ}ながら月が出たように、見えないその人と、思うと、男が五人、中に主人もいたでありましょう。婦人^{おんな}は唯御新姐^{ただごしんぞ}一人、それを取巻く如くにして、どやどやと些^ちと急^{いそぎあし}足^{あし}で、浪打際^{なみうちぎわ}の方へ通つたが、その人数^{にんず}じゃ、空頼^{そらだの}めの、余所^{よそ}ながら目礼^{めれい}処^{ところ}の騒^{さわ}ぎかい、貴下^{あなた}、その五人の男というのが。」

十五

「眉の太い、怒り鼻のがあり、額の広い、顎の尖った、下目で睨むようなのがあり、仰向けざまになつて、頬髯の中へ、煙も出さず葉巻を突込んでゐるのがある。くるりと尻を引捲つて、扇子で叩いたものもある。どれも浴衣がけの下司は可いが、その中に浅黄の兵児帯、結目をぶらりと二尺ぐらい、こぶらの辺までぶら下げたのと、緋縮緬の扱帯をぐるぐる巻きに胸高は沙汰の限。前のは御自分ものであろうが、扱帯の先生は、酒の上で、小間使のを分捕の次第らしい。

これが、不思議に客人の気を悪くして、入相の浪も物凄くなりかけた折からなり、あの、赤鬼青鬼なるものが、かよいい人を冥土へ引立てて行くようで、思いなしか、引挟まれた御新姐は、何んとなく物寂しい、快からぬ、滅入った容子に見えて、ものあわれに、命がけにでも其奴らの中から救つて遣りたい感じが起つた。家庭の様子もほぼ知れたようで、気が揉める、と言われたのでありますが、貴下、これは無理じやて。

地獄の絵に、天女が天降つた処を描いてあつて御覧なさい。餓鬼が救われるようで尊

から。

蛇が、つかわしめじやと申すのを聞いて、弁財天を、ああ、お気の毒な、さぞお氣味が悪かろうと思うものはありますまいに。迷いじゃね。」

散策子はここに少しく腕組みした。

「しかし何ですよ、女は、自分の惚れた男が、別嬪の女房を持つてると、嫉妬らしいようですがね。男は反対です、」

と聊か論ずる口吻。

「ははあ、」

「男はそうでない。惚れてる婦人が、小野小町花、大江千里月という、対句通りになると安心します。」

唯今の、その浅黄の兵児帯、緋縮緬の扱帯と来ると、些と考えねばなくなる。

耶穌教の信者の女房が、主キリストと抱かれて寝た夢を見たと言うのを聞いた時の心地と、回々教の魔神になぐさまれた夢を見たと言うのを聞いた時の心地とは、きつとそれは違います。

どっち路、嬉くない事は知れていますかね、前のは、先ず先ずと我慢が出来る、後のは、

堪^{かん}忍^{にん}がなりますまい。

まあ、そんな事は措^おいて、何んだつてまた、そう言う不愉快な人間ばかりがその夫人を取巻いているんでしよう。」

「そこは、玉脇^{たまわき}がそれ鍬^{くわ}の柄^{つか}を杖^{つえ}に支^ついて、ぼろ半纏^{ぼんでん}に引^ひくめるめの一件で、ああ遣^やつて大概^{たいがい}な華族も及^{およ}ばん暮^くしをして、交際^{かいざい}にかけては錢^ぜ金^{にかね}を惜^{おし}まんでありすが、情^{なさけ}ない事^{こと}には、遣^{やり}方^{かた}が遣^{やり}方^{かた}ゆえ、身分^{みぶん}、名譽^{めいよ}ある人は寄^よつきませんで、悲^{かな}哉^{しいかな}その段は、如何^{いか}わしい連中ばかり。」

「お待ちなさい、なるほど、そうするとその夫人と言うは、どんな身分の人なんでしょうか。」
 出家^{しゅつが}はあらためて、打^{うち}領^{うなず}き、かつ咳^{せわぶき}して、

「そこでございます、御新姐^{ごしんぞ}はな、年^{とし}紀^ぎは、さて、誰^{たれ}が目^めにも大^{たい}略^{りやく}は分^わります、先^{さき}ず二十三、四、それとも五、六かと言う處^{ところ}で、」

「それで三人の母^{おつかさん}様^{さま}？ 十二、三のが頭^{かしら}ですかい。」

「否^{いいえ}、どれも実子^{じっし}ではないでございます。」

「ままッ児^こですか。」

「三人とも先妻^{ひと}が産^うみました。この先妻^{ひと}についても、まず、一^{ひと}くさりのお話^{はなし}はあるでござ

いますが、それは余事ゆえに申さずとも宜しかる。

二、三年前に、今のを迎えたのでありますが、此処でありますよ。

何処の生れだか、育ちなのか、誰の娘だか、妹だか、皆目分らんでございます。貸して、かたに取ったか、出して買うようにしたか。落魄れた華族のお姫様じやと言うのもあれば、分散した大所の娘御だと申すのもあります。そうかと思うと、箔のついた芸妓に違いないと申すもあるし、豪いのは高等淫売の上りだろうなどと、甚しい沙汰をするのがござって、丁と底知れずの池に棲む、ぬしと言うもののように、素性が分らず、ついぞ知ったものもない様子。」

十六

「何にいたせ、私なぞが通りすがりに見懸けましても、何んとも当りがつかぬでございます。勿論また、坊主に鑑定の出来ようはずはなけれどもな。その眉のかかり、目つき、愛嬌があるとは申すではない。口許なども凛として、世辞を一つ言うようには思われぬが、唯何んもなく賢げに、恋も無常も知り抜いた風に見える。身体つきにも顔つきにも、

情が滴ると言つた状じや。

恋い慕うものならば、馬士でも船頭でも、われら坊主でも、無下に振切つて邪険にはしそうもない、仮令恋はかなえぬまでも、然るべき返歌はありそうな。帯の結目、袂の端、何処へちよつと障つても、情の露は男の骨を溶解かさずと言うことなし、と申す風情。されば、氣高いと申しても、天人神女の倅ではのうて、姫路のお天守に緋の袴で燈台の下に何やら書を繙く、それ露が滴るように婀娜と言うて、水道の水で洗い髪ではござらぬ。人跡絶えた山中の温泉に、唯一人雪の膚を泳がせて、丈に余る黒髪を絞るとかの、それに肖まして。

慕わせるより、懐しがらせるより、一目見た男を魅する、力広大。少からず、地獄、極楽、娑婆も身に附絡うていそうな婦人、従うて、罪も報も浅からぬげに見えるでございます。

ところへ、迷うた人の事なれば、浅黄の帯に緋の扱帯が、牛頭馬頭で逢魔時の浪打際へ引立てても行くように思われたのでありましょう——私どもの客人が——そういう心持で御覧なさればこそ、その後は玉脇の邸の前を通がかり。……
浜へ行く町から、横に折れて、背戸口を流れる小川の方へ引廻した蘆垣の蔭から、

松林の幹と幹とのなかへ、襟えりから肩のあたり、くつきりとした耳みもと許きわだが際立きわだつて、帯すそも裾すそも見えないのが、浮出うきだしたように真中へあらわれて、後あと前さきに、これも肩から上ばかり、爾そのとき時は男が三人、一ひとならびに松の葉とすれすれに、しばらく桔梗ききよう刈萱かりかやが靡なびくように見えて、段々だんだん低くなつて隠れたのを、何か、自分との事のために、離座敷はなれざしきか、座敷ざしき牢うへでも、送られて行くように思われた、後あと前さきを引ひ挟つまんだ三人の漢おとこの首の、兇悪おとこなのが、確たしかにその意味を語つていたわ。もうこれきり、未来まで逢あえなかつたかとも思われる、と無理なことを言うのであります。

さ、これもじや、玉脇たまわきの家の客人だち、主人まじりに、御新姐ごしんぞが、庭つぎやまの築山つきやまを遊あそんだと思えば、それまででありますように。

とうとう表通りだけでは、気が済まなくなつたと見えて、前まえ申まへした、その背戸口せどぐち、搦からめ手のな、川を一つ隔へてた小松原の奥深く入り込んで、うろつくようになったそうで。

玉脇たまわきの持地もちじじやありますが、この松原は、野開のびらきにいたしてござる。中には汐入しおいりの、ちよつと大きな池もあります。一面に青草あおくさで、これに松の翠みどりがかさなつて、唯今頃ただいまごろは菫すみれ、夏すみれは常夏とこなつ、秋は萩はぎ、真個まことに幽翠ゆうすいな処ところ、些ちと行らして御覧ごらんじろ。」

「薄暗い処ですか、」

「藪やぶのようではありません。真ま蒼さな処ところであります。本でも御覧なさりながらお歩ある行いきには、至極よろ宜いいので、」

「蛇へびがいきましょう、」

と唐突だしぬけに尋ねた。

「お嫌いか。」

「何とも、どうも、」

「否いへ、何の因果か、あのくらい世の中に嫌われるものも少のうござる。

しかし、氣をつけて見ると、あれでもしおらしいもので、路端みちばたなどを我われは顔がで伸のして
る処ところを、人が参つて、熟じつと視ながめて御覧なさい。見返しますがな、極きりが悪わるそうに鎌首かまくびを
垂たれて、向うむきに羞はにか含かみますよ。憎にくくないもので、ははははは、やはり心がありますよ
。」

「心があられてはなお困るじやありませんか。」

「否いへ、塩氣を嫌うと見えまして、その池のまわりには些ちつともおりません。邸やしきにはこの頃じ
や、その魅みするような御新姐ごしんぞも留主るすなり、穴あなはすかすかと真黒まっくろに、足許に蜂はちの巣になつ
ておりまして、蟹かにの住居すまい、落ちるような憂慮きづかいもありません。」

十七

「客人は、その穴さえ、白髑髏されこうべの目とも見えたでありますよ。

池をまわつて、川に臨んだ、玉脇の家造やづくりを、何か、御新姐ごしんぞのためには牢獄でもあるような考えでござるから。

さて、潮しほのさし引ひきばかりで、流れるものではありません、どんより鼠色ねずみいろに淀よどんだ岸に、浮きもせず、沈みもやらず、末始終すえしじゆうは碎けて鯉鮒こいかなにもなりそうに、何時頃いつごろのか五、六本、丸太が浸ひたっているのを見ると、ああ、切組きりくめば船になる。繋つなぎ合わせば筏いかだになる。しかるに、綱さおも棹さおもない、恋の淵ふちはこれで渡らねばならないものか。

生身いきみでは渡られない。靈魂たましいだけなら乗れようものを。あの、樹立こだちに包まれた木戸きどの中うちには、その人が、と足を爪立つまだつたりなんぞして。

蝶ちょうの目からも、余りふわふわして見えたでござろう。小松の中をふらつく自分も、何んだかその、肩から上ばかりに、裾すそも足もなくなった心地、日中ひなかの妙な蝙蝠こうもりじやて。

懐中かいちゆう 中から本を出して、

ろうこうたかくかりしやをてらしてむなし
 蠟 光 高 懸 照 紗 空、

かぼうよるつくこうしゆきゆう
 花房夜搗紅守宮、

ぞうこうをふいてとうとうあたたかにせいろにかかつてろうばんをきく
 象口吹香※※暖、 七星挂城聞漏板、

さむさふしにいつてでんえいくらく、
 寒入罽※ 殿 影 昏、 彩鸞簾額著霜痕、

ええ、何んでも此処は、ここ 蛭が鉤闌の下に月に鳴く、けら こうらん 魏の文帝に寵せられた甄夫人
 が、後のちにおとろえて幽閉されたと言うので、あけんをとさす 鎖阿甄。とあつて、それから、

ゆめにかもんにいつてしやしにのぼる
 夢入家門上沙渚、
てんがおつところちようしゆうのみち 天河落処長洲路、

ねがわくばきみこうみようたいようのごとくなれ
 願 君 光 明 如 太陽、

しようはな 妾を放て、そうすれば、魚に騎きし、波をひらいて去らん、というのを微吟びぎんして、思わず、

襟えりにはらはらと涙が落ちる。目を睜みはつて、その水中の木材よ、いで、浮べ、鰭ひれふつて木戸
 に迎えよ、と睨にらむばかりに瞻みつめたのでござるそうな。些ちと尋常事ただごとではありませんな。

詩は唐詩選とうしせんにでもありませんようか。」

「どうですか。ええ、何んですつて——夢に家門かもんに入つて沙渚しゃしよに上る。魂たましいが沙漠さばくをさま
 よつて歩行あるくようね、てんがおつところちようしゆうのみち 天河落処長洲路、あわれじやありませんか。

それを聞くと、私わたしまで何んだか、その婦人が、幽閉されているように思います。

それからどうしましたか。」

「どうと申して、段々頤おとががこけて、日に増し目が窪くぼんで、顔の色がいよいよ悪い。

或あるとき時、大奮発じや、と言うて、停車場ていしやば前の床屋へ、顔を剃そりに行ゆかれました。その時
だつたと申す事で。

頭を洗うし、久しぶりで、些ち心持ちも爽さわになつて、ふらりと出ると、田舎いなかには荒物あらもの
屋が多いでございます、紙、煙草、蚊遣香、勝手道具、何んでも屋と言つた店で。床とこ
店の筋向すじむこうが、やはりその荒物店であります処、戸外へは水を打つて、軒のきの提灯ちやうちん
にはまだ火を点さぬ、溝石みぞいしから往来へ縁台えんだいを跨またがせて、差向さむかいに将棊しょうぎを行つて
います。端はしの歩ふが附木つけぎ、お定さだりの奴で。

用なしの身体からだゆえ、客人が其処そこへ寄つて、路傍みちばたに立つて、両方ともやたらに飛車角ひしやかく
取替とりかえこ、ころりころり差違さちがえるごとに、はい、はい、と言う勇ましい懸声かけこゑで。おま
けに一人の親仁おやしなぞは、媽々衆かかしゆうが行、水の間、引渡ひきわたされたものと見えて、小児こどもを一人
あぐらあぐら胡坐あぐらの上へ抱いて、雁首がんくびを俯向うつむけに銜くわえ煙管ぎせる。

で銜くわえたまんま、待てよ、どつこい、と言うたびに、煙管ぎせるが打附ぶつりそうになるので、抱
かれた児こは、親仁おやしより、余計ひたに額ひたいに皺しわを寄せて、雁首がんくびを狙ねらつて取ろうとする。火は附い
ていないから、火傷やけどはさせぬが、夢中で取られまいと振動ふりうごかす、小児こどもは手を出す、飛車

を遁^にげる。

よだれを垂^{たら}々と垂らしながら、占^{しめ}た！ とばかり、やにわに對^{あいて}手の玉將^{たいしょう}を引^ひ拵^{つか}むと、大きな口をへの字形^{じなり}に結んで見ていた赭^{あか}ら顔^{がお}で、脊^せ高^{いたか}の、胸の大きい禪^{ぜん}門^{もん}が、鉄^{かね}挺^{てい}のような親指^{こゝろさき}で、いきなり勝った方の鼻^{はな}つ頭^{かしら}をぐいと掴^{つか}んで、豪^{えら}いぞ、と引^ひ伸^のばしたと思^{おも}ひ召^めせ、はははははは。」

十八

「大きな、ハツクサメをすると煙^{たばこ}草を落した。額^{おでこ}こツつりで小兒^{こども}は泣き出す、負けた方は笑い出す、涎^{よだれ}と何んかと一緒にござろう。鼻をつまんだ禪^{ぜん}門^{もん}、苦々^{にが}しき顔^{がん}色^{しよく}で、指^{もて}を持^も余^あした、塩^{あん}梅^{ばい}な。

これを機^し会^おに立去ろうとして、振返ると、荒物屋と葭^{よし}簀^す一枚、隣^{りん}家^かが間^まに合わせの郵便局^{ゆうびんきょく}で。其^{そこ}処^この門^{かど}口^{ぐち}から、すらりと出たのが例のその人。汽車が着いたと見えて、馬車、車^{くるま}がらがらと五、六台、それを見に出たものらしい、郵便局の軒^{のき}下^{した}から往來を透かすようにした、目が、ばったり客人と出逢ったでありましょう。

心ありそうに、そうすると直ぐに身を引いたのが、隔ての葭簀よしずの陰になって、顔を背向そむけもしないで、其処そこで向直むきなつてこつちを見ました。

軒下の身を引く時、目で引ひつけられたような心持こころがしたから、こつちもまた葭簀越よしずごしに。

爾時そのときは、総髪そうはつの銀杏いちようがえし返へで、珊瑚さんごの五分珠ごぶだまの一本差いっほんざし、髪けの所為せいか、いつもより

眉まゆが長く見えたと言います。浴衣ゆかたながら帯には黄金鎖きんぐさりを掛けていたそうではありますが、

揺れてその音のするほど、こつちを透すかすのに胸を動かした、顔がさ、葭簀よしずを横にちらちら

と霞かすみを引いたかと思う、これに眩めくるめくばかりになつて、思わずちよつと会釈えしやくをする。

向うも、伏目ふしめに俯向うつむいたと思うと、リンリンと貴下あなた、高く響いたのは電話の報知しらせじや。

これ待まちっていたでございすな。

すぐに電話口へ入つて、姿は隠れましたが、浅間あさまゆえ、よく聞える。

(はあ、私わたし。あなた、余あんまりですわ。余あんまりですわ。どうして来て下さらないの。怨うらんでいま

すよ。あの、あなた、夜よも寝られませんか。はあ、夜中に汽車のつくわけはありませんけれ

ども、それでも今にもね、来て下さりはしないかと思つて。

私の方はね、もうね、ちよいと……どんなに離れておりましても、あなたの声はね、電

話でなくつても聞えます。あなたには通じますまい。

どうせ、そうですよ。それだって、こんなにお待ち申している、私のためですもの……
 気かねてばかりいらつしやらなくても宜しいわ。些とは不義理、否、父さんやお母さん
 に、不義理と言うこともありませんけれど、ね、私は生命かけて、きつとですよ。今夜に
 も、寝ないでお待ち申しますよ。あ、あ、たんと、そんなことをお言いなさい、どうせ寝
 られないんだから可うございます。怨みますよ。夢にでもお目にかかりましょうねえ、否、
 待たれない、待たれない……)

お道か、お光か、女の名前。

(……みいちゃん、さようなら、夢で逢いますよ。) ——
 きりきりと電話を切ったて。」

「へい、」

と思わず聞惚れる。

「その日は帰ってから、豪い元気で、私はそれ、涼しさやと言った句の通り、縁から足を
 ぶら下げる。客人は其処の井戸端に焚きます据風呂に入って、湯をつかいながら、露出し
 の裸体談話。
 はだかばなし

そつちと、こつちで、高声でな。尤も隣近所はござらぬ。かけかまいなしで、電

話の仮声まじりか何かで、

(やあ、和尚さん、梅の青葉から、湯気の中へ糸を引くのが、月影に光って見える、蜘蛛が下りた、)

と大氣　じや。

(万歳、々々、今夜お忍か。)

(勿論、)

と答えて、頭のあたりをざぶざぶと、仰いで天に愧じざる顔色でありました。が、日頃の行いから察して、如何に、思死をすればとて、いやしくも主ある婦人に、そういう不料簡を出すべき仁でないと思いました、果せる哉。

冷奴に紫蘇の実、白瓜の香の物で、私と取膳の飯を上ると、帯を緊め直して、(もう一度そこいらを。)

いや、これとは、ぎよつとしたが、垣の外へ出られた姿は、海の方へは行かないで、それ、その石段を。」

一面の日当りながら、蝶の羽の動くほど、山の草に薄雲が軽く靡いて、檐から透すと、峰の方は暗かった、余り暖さが過ぎたから。

十九

降ろうも知れぬ。日向へ蛇が出てゐる時は、雨を持つという、来がけに二度まで見た。
 で、雲が被つて、空氣が湿つた所為か、笛太鼓の囃子の音が山一ツ越えた彼方と思う
 あたりに、蛙が唧くように、遠いが、手に取るばかり、しかも沈んでうつつの音楽のよう
 に聞えて来た。靄で蠟管の出来た蓄音器の如く、かつ遙に響く。

それまでも、何かそれらしい音はしたが、極めて散漫で、何の声とも纏まらない。村々
 の蔀、柱、戸障子、勝手道具などが、日永に退屈して、のびを打ち、欠伸をする氣勢か
 と思つた。いまだ昼前なのに、——時々牛の鳴くのが入交つて——時に笑い興ずるよう
 な人声も、動かない、静かに風に伝わるのであつた。

フト耳を澄ましたが、直ぐに出家の言になつて、

「大分町の方が賑いますな。」

「祭礼でもありますか。」

「これは停車場近くにいらつしやると承りましたに、つい御近所でございます。」

停車場の新築開き。」

如何にも一月ばかり以前から取沙汰した今日は当日。規模を大きく、建直した落成式、停車場に舞台がかかる、東京から俳優が来る、村のものの茶番がある、餅を撒く、昨夜も夜通し騒いでいて、今朝来がけの人通りも、よけて通るばかりであつたに、はたと忘れていたらしい。

「まったくお話しに聞惚れましたか、こちらが里離れて閑静な所為か、些とも気が附ないでおりました。実は余り騒々しいので、そこを遁げて参つたのです。しかし降りそうになつて来ました。」

出家の額は仰向けに廂を潜つて、

「ねんばり一湿りでございましょう。地雨にはなりますまい。何、また、雨具もござる。芝居を御見物の思召がなくば、まあ御緩りなすつて。」

あの音もさ、面白可笑く、こつちも見物に参る気でもござると、じつと落着いてはいられないほど、浮いたものでありますが、さてこう、かけかまいなしに、遠ざかつておりますと、世を一ツ隔てたように、寂しい、陰気な、妙な心地がいたすではありませんか。」

「真箇ですね。」

「昔、井戸を掘ると、地じの下に犬鷄いねとりの鳴く音、人声、牛車ぎゅうしゃの軋きしる音などが聞えたという話があります。それに似ておりますな。

峠から見る、霧の下だの、暗やみの浪打際なみうちぎわ、ぼうと灯あかりが映る処うつところだの、かように山の腹を向うへ越した地じの裏などで、聞きますのは、おかしく人間業にんげんわざでないようだ。夜中に聞いて、狸囃子たぬきばやしと言うのも至極でございます。

いや、それに、つきまして、お話の客人でありますが、――

と、茶を一口急いで飲み、さしおいて、

「さて今申した通り、夜分にこの石段を上のぼって行ゆかれたのであります。

しかしこれは情じように激はして、発奮はつふんんだ仕事ではなかつたのでございます。

こうやって、この庵室あんじつに馴なれました身には、石段はつい、通い廊下かよろうかを縦に通るほどな心地こころちでありますからで。客人は、堂へ行ゆかれて、柱板はしらいた敷じきへひらひらと大きくさす月の影、海の果はてには入日の雲が焼残やけのこって、ちらちら真紅しんくに、黄昏たそがれ過ぎの渾沌こんとんとした、水も山も唯一面ただの大池の中に、その軒端洩のきばもる夕日の影と、消え残る夕焼の雲の片きれと、紅蓮ぐれん白びやく蓮れんの咲乱さきみだれたような眺望ながめをなさつたそうな。これで御法みのりの船に同じい、御堂おどうの縁えんを離れさえなさらなかつたら、海に溺おぼれるようなことも起らななでございましょう。

爰こゝに希き代たいな事ことは――

堂だうの裏山うりさんの方かたで、頻しきりに、その、笛ふえ太たい鼓こ、囃はや子しが聞きえたと申まうす事こと――

唯ただ今いま、それ、聞きえますな。あれ、あれとは、まるで方角かつかくは違ちがいます。一

と出家こころもは法衣ころもでずいと立たつて、廂ひさしから指ゆびを出でして、御堂みでうの山さんを左ひだりの方かたへぐいと指さした。

立たち方かたの唐突だしぬけなのと、急いそなのと、目め前さきを塞ふさいだ墨すみ染ぞめに、一いつ天てんする墨すみを流ながすかと、袖そでは

障子しょうじを包つつんだのである。

二十

「堂だうの前まえを左ひだりに切きれると、空そらへ抜ぬいた隧トンネル道みちのように、両りやう端はしから突つき出でました巖いわの間ま、樹立こだちを潜くぐつて、裏山うりさんへかかるであります。

両方谷たに、海かたの方かたは、山さんが切きれて、真中まんなかの路みちを汽車くるまが通とほる。一方ひは一ひと谷落たにちて、それ

からそれへ、山また山、次第しだいに峰みねが重おもなつて、段々くもぎり雲霧うんむが深ふかくなります。処々ところどころ、山の

尾おが樹きの根ねのように集あつまつて、広々あつまとした青田あおたを抱かかえた処ところもあり、炭焼すすき小屋こやを包つつんだ処ところもご

ざいます。

其処そこで、この山伝いの路は、がけ崖の上を高い堤防つつみを行く形、時々、島や白帆しらほの見晴しへ出ますばかり、あとは生繁おいしげつて真暗まっくらで、今時は、さまでにもありませんが、草が繁りますと、分けずには通られません。

谷うぐいすには鶯、峰には目白四十雀めしろしじゅうからさえずの囀とろろっている処もあり、紺青こんじょうの巖いわの根に、春は堇すみれ秋は竜胆りんどうの咲く処ところ。山清水やましみずがしとしと湧く径わこみちが薬研やげんの底のようで、両側の篠簞しのざさをまたいで通るなど、ものの小半道踏こはんみちふみわ分けて参りますと、其処そこまでが一峰ひとみねで。それからがけ崖になつて、郡ぐんが違い、海の趣おもむきもかわるのでありますが、そのがけ崖の上に、たとえて申さば、この御堂みどうと背中合わせに、山の尾へ凭よつかかつて、かれこれ大仏だいぶつぐらいな、石地藏いしじぞうが無手むずと胡坐あぐらしてござります。それがさ、石地藏と申し伝えるばかり、よほどのあら刻みで、まず坊主形ぼうずなりの自然石じねんせきと言うても宜よろしい。妙に御顔おかおの尖すがった処が、拜すむと凄すこうござつてな。

堂は形だけ残つておりますけれども、勿体もったいないほど大破たいはいたして、密そつと参つても床ゆかなぞずぶずぶと踏ふみぬ抜ぬきますわ。屋根も柱も蜘蛛くもの巣のように狼藉ろうぜきとして、これはまた境けい内いへ足いの入場いればもなく、がけ崖へかけて倒れてな、でも建物があつた跡じや、見霽みはらしの広場になつておりますから、これから山越やまごしをなさる方かたが、うっかり其処そこへござつて、唐突だしぬけの山

まほとけ
 仏に胆を潰すと申します。

其処を山続きの留りにして、向うへ降りる路は、またこの石段のようなものではありません。わずかの間も九十九折の坂道、嶮い上に、か石を入れたあとのあるだけに、爪立つて飛々に這い下りなければなりません、この坂の両方に、五百体千体と申す数ではない。それはそれは数え切れぬくらい、いずれも一尺、一尺五寸、御丈三尺というのは、小さな石、仏がすすくすすと並んで、最も長い年月、路傍へ転げたのも、倒れたのもあつたでありましょうが、さすがに跨ぐものはないと見えます。もたれなりにも櫛の歯のように揃つてあります。

これについて、何かいわれのございましたことか、一々女の名と、亥年、午年、幾歳、幾歳、年齢とが彫りつけてございましてな、何時の世にか、諸国の婦人たちが、挙つて、心願を籠めたものでございましょう。ところで、雨露に黒髪は霜と消え、袖裾も苔と變つて、影ばかり残つたが、お面の細く尖つた処、以前は女体であつたらうなどという、いや女体の地蔵というはありませんが、さてそう聞くと、なお氣味が悪いではございせんか。

ええ、つかぬことを申したようであります、客人の話について、些と考えました事が

こざる。客人は、それ、その山路やまみちを行かれたので——この観音かんおんの御堂みどうを離れて、
「なるほど、その何んとも知れない、石像の処へ、」

と胸を伏せて顔を見る。

「いやいや、其処そこまでではありません。唯ただその山路へ、堂の左の、巖間いわまを抜けて出たものでございます。

トというのが、手に取るように、囃はやしの音が聞えたからで。

直じきその谷間たにあいの村あたりで、騒いでいるように、トントンと山腹へ響いたと申すのでありますから、ちよつと裏山へ廻りさえすれば、足許に瞰みお下ろされますような勘定かんじようであつたので。客人は、高い処ところから見物をなさる氣でござつた。

入り口くちはまだ月のたよりがございます。樹の下を、草を分けて参りますと、処々ところどころ窓のように山が切れて、其処そこから、松葉搔まつばかき、枝拾い、じねんじよ穿ほりが谷へさして通行する、下の村へ続いた路みちのある処が、あつちこつちにいくらもございます。

それへ出ると、何処どこでも広々と見えますので、最初左の浜はま庇び、今度は右の茅かやの屋根あかると、二、三箇がしよ処、その切目きれめへ出て、覗のぞいたが、何処どこにも、祭礼まつりらしい処はない。海は明るく、谷は煙けふつて。」

二十一

「けれども、その囃子の音は、草一叢、樹立一畝出さえすれば、直き見えそうに聞えますので。二足が三足、五足が十足になつて段々深く入るほど——此処まで来たのに見ないで帰るも残惜い氣もする上に、何んだか、旧へ帰るより、前へ出る方が路も明いかと思われて、些と急足になると、路も大分上りになつて、ぐいと伸上るように、思い切つて真暗な中を、草を撈つて、身を退いて高い処へ。ぼんやり薄明るく、地ならしがしてあつて、心持、墓地の縄張の中でもあるような、平な丘の上へ出ると、月は曇つてしまつたか、それとも海へ落ちたかという、一方は今来た路で向うは峯、谷か、それとも浜辺かは、判然せぬが、底一面に靄がかかつて、その靄に、ぼうと遠方の火事のような色が映つていて、篝でも焼いているかと、底澄んで赤く見える、その辺に、太鼓が聞える、笛も吹く、ワアという人声がする。

如何にも賑かそうだが、さて何処とも分らぬ。客人は、その朦朧とした頂に立つて、境は接しても、美濃近江、人情も風俗も皆違ふ寝物語の里の祭礼を、此処で見えるかと思わ

れた、と申します。

その上、宵宮よみやにしては些ちと賑にぎやか過ぎる、大方本祭ほんまつりの夜よ？それで人の出盛りでさかが通り過ぎた、よほど夜更よふけらしい景色なに視みめて、しばらく茫然ぼうぜんとしてござったそうな。

ト何んとなく、心寂こころさびしい。路みちもよほど歩行あるいたような気がするので、うっとり草臥くたびれて、もう帰ろうかと思う時、その火気かきを包んだ霏もやが、こう風にでも動くかと覚えて、谷底から上へ、裾すそあがりに次第しだいに色が濃こうなつて、向うの山かけて映る工合ぐあいが直じき目の前で燃してある景色——最もも霏もやに包まれながら——

そこで、何か見極みきわめたい気もして、その平地ひらちを真直まっすぐに行くと、まず、それ、山の腹が覗のぞかれましたわ。

これはしたり！祭礼まつりは谷間たにまの里からかけて、此処ここがそのとまりらしい。見た処ところで、薄くなつて段々に下へ灯影ひかげが濃くなつて次第しだいに賑にぎやかになっています。

やはり同一おんなじような平な土で、客人のござる丘と、向うの丘との中に箕みの形になつた場所。つまさきつまさきもすべすべ、静しずかに安やす々と下りられた。

ところが、箕みの形の、一方はそれ祭礼まつりに続く谷の路みちでございましょう。その谷の方に寄つた畳なら八畳ばかり、油が広く染にじんだ体ていに、草がすつぺりと禿はげました。」

といいかけて、出家は瀬戸物の火鉢を、縁の方へ少しずらして、俯向いて手で畳を仕切った。

「これだけな、赤地の出た上へ、何かこうぼんやり踞つたものがある。」

ト足を崩してとかくして膝に手を置いた。

思わず、外の方を見た散策子は、雲のやや軒端に近く迫るのを知った。

「手を上げて招いたと言います——ゆつたりと——行くともなしに前へ出て、それでも間二、三間隔つて立停まつて、見ると、その踞つたものは、顔も上げないで俯向いたまま、股引のようなものを穿いている、草色の太い胡坐かいた膝の脇に、差置いた、拍子木を取つて、カチカチと鳴らしたそうで、その音が何者か齒を噛合わせるように響いたと言います。」

そうすると、

「はあ、はあ、」

「薄汚れた帆布綿めいた破穴だらけの幕が開いたて、」

「幕が、」

「さよう。向う山の腹へ引いてあつたが、やはり霽に見えていたので、そのものの手に、

綱が引いてあつたと見えます、踞うずくまつたままで立ちもせんので。

窪くぼんだ浅い横穴じゃ。大きかつたといひますよ。正面に幅一間けんばかり、尤もつとも、この辺にはちよいちよいさういうのを見懸せどけます。背戸せどに近い百姓屋などは、漬物桶つけものおけを置いたり、青物を活いけて重宝ちようほうがる。で、幕を開けたからにはそれが舞台で。」

二十二

「なるほど、そう思えば、舞台の前に、木の葉がばらばらと散ちらばつた中へ交まじつて、投なげ銭せんが飛んでいたらしく見えたそうでございます。

幕かざりが開あいた——と、まあ、言う体ていであります、さて唯ただ浅い、扁ひらつたい、窪くぼみだけで。何んの飾かざりつけも、道具だてもあるのではござらぬ。何か、身体からだもぞくぞくして、余り見ていたくもなかつたそうだが、自分を見懸まけて、はじめたものを、他に誰一人いるではなし、今いま更まさ帰るわけにもありませんような羽目になつたとか言つて、懷かい中ちゆうの紙入かみいれに手を懸かけながら、茫ぼんやり乎や見ていたと申します。

また、陰気な、湿しめっぽい音おんで、コツコツと拍子木ひょうしぎを打ぶ違ちがえる。

やはりそのもの手から、ずうと糸が繋がつていたものらしい。舞台の左右、山の腹へ斜めにかかった、一幅の白い靄が同じく幕でございました。むらむらと両方から舞台へ引寄せられると、煙が渦くように畳まれたと言います。

不細工ながら、窓のように、箱のように、黒い横穴が小さく一ツずつ三十五と一側並べに仕切つてあつて、その中に、ずらりと婦人が並んでいました。

坐つたのもあり、立つたのもあり、片膝立てたじだらくな姿もある。緋の長襦袢ばかりのものもある。頬のあたりに血のたれているものもある。縛られているものもある、一目見たが、それだけで、遠くの方は、小さくなつて、幽になつて、唯顔ばかり谷間に白百合の咲いたよう。

慄然として、遁げもならない処へ、またコンコンと拍子木が鳴る。

すると貴下、谷の方へ続いた、その何番目の仕切の中から、ふらりと外へ出て、一人、小さな婦人の姿が、音もなく歩行いて来て、やがてその舞台へ上つたでございしますが、其処へ来ると、並の大きさの、しかも、すらりとした脊丈になつて、しよんぼりした肩の処へ、こう、頤をつけて、熟と客人の方を見向いた、その美しさ！

正しく玉脇の御新姐で。」

二十三

「寝衣ねまきにぐるぐると扱帯しじきを巻いて、霜しものような跣足はだし、そのまま向うむきに、舞台の上へ、崩折くずおれたように、ト膝を曲げる。

カンと木を入れます。

釘づけくぎのようになって立窘たちすくんだ客人の背後うしろから、背中を摺すって、ずッと出たものがある。

黒い影で。

見物が他たにもいたかと思う、とそうではない。その影が、よろよろと舞台へ出て、御新ごしん姐んぞと背中合わせにぴったり坐とつた処で、こちらを向いたでございましょう、顔を見ると自分です。」

「ええ！」

「それが客人御自分なのであります。で、私わたくしへお話に、

(真個なら、其処で死ななければならんのだした、)

と言つて歎息して、真蒼になりましたつけ。

どうするか、見ていたかつたそうです。勿論、肉は躍り、血は湧いてな。

しばらくすると、その自分が、やや身体を捻じ向けて、惚々と御新姐の後姿を見入つ

たそうで、指の尖で、薄色の寝衣の上へ、こう山形に引いて、下へ一ツ、△を書いたでござ

いますな、三角を。

見ている胸はヒヤヒヤとして冷汗がびっしりになる。

御新姐は唯首垂れているばかり。

今度は四角、□、を書きました。

その男、即客人御自分が。

御新姐の膝にかけた指の尖が、わなわなと震えました……とな。

三度目に、○、円いものを書いて、線の端がまとまる時、颯と地を払って空へ抉るよう

な風が吹くと、谷底の灯の影がすつきり冴えて、鮮かに薄紅梅。浜か、海の色か、と見

る耳許へ、ちやらちやらと鳴つたのは、投げ銭と木の葉の摺れ合う音で、くるくると廻

った。

気がつく、と、四、五人、山のように背後から押被さつて、何時の間にか他に見物が出た。

爾時、御新姐の顔の色は、こぼれかかった艶やかなおくれ毛を透いて、一入美しくなつたと思うと、あのその口許で莞爾として、うしろぎまにたよたよと、男の足に背をもたせて、膝を枕にすると、黒髪が、ずるずると仰向いて、真白な胸があらわれた。その重みで男も倒れた、舞台がぐんぐんずり下つて、はッと思うと旧の土。

峰から谷底へかけて哄と声がする。そこから夢中で駈け戻つて、蚊帳に寝た私に縋りついて、

(水を下さい。)

と言うて起された、が、身体中疵だらけで、夜露にずぶ濡であります。

それから暁かけて、一切の懺悔話。

翌日は一日寝てござつた。午すぎに女中が二人ついて、この御堂へ参詣なさつた御新姐の姿を見て、私は慌てて、客人に知らさぬよう、暑いのに、貴下、この障子を閉切つたでございますよ。

以来、あの柱に、うたゝ寐の歌がありますので。

客人はあと二、三日、石の唐櫃に籠ったように、我と我を、手足も縛るばかり、謹んで引籠ってござったし、私もまた油断なく見張っていたでございしますが、貴下、聊か目を離しました僅の隙に、何処か姿が見えなくなつて、木樵が来て、点燈頃、
 (私、今、来がけに、彼処さ、蛇の矢倉で見かけたよ、)
 と知らせました。

客人はまたその晩のような芝居が見たくなつたのでございましょう。

死骸は海で見つかりました。

蛇の矢倉と言うのは、この裏山の二ツ目の裾に、水のたまつた、むかしからある横穴で、わツという、おう——と底知れず奥の方へ十里も広がつて響きます。水は海まで続いていると申伝、えるであります、如何なものでございますかな。――

雨が二階家の方からかかつて来た。音ばかりして草も濡らさず、裾があつて、路を通うようである。美人の霊が誘われたらう。雲の黒髪、桃色衣、菜種の上を蝶を連れて、庭に来て、陽炎と並んで立つて、しめやかに窓を覗いた。

青空文庫情報

底本：「春昼・春昼後刻」岩波文庫

1987（昭和62）年4月16日第1刷発行

1999（平成11）年7月5日第19刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十卷」岩波書店

1940（昭和15）年5月

初出：「新小説」

1906（明治39）年11月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：小林繁雄

校正：平野彩子、土屋隆

2006年7月18日作成

2011年2月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春昼

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>